



「ずーっと。」

それはみなさまの一生に寄り添うこと

溪仁会グループCSRレポート2010

CORPORATE SOCIAL RESPONSIBILITY REPORT

iK 溪仁会グループ

医療 溪仁会 社会福祉 溪仁会
法人 法人

溪仁会グループの事業理念

【事業理念】

安心感と満足の提供
Offering a Sense of Security and Satisfaction

信頼の確立
Building the Foundations of Trust

プロフェッショナル・マインドの追求
Attaining a Professional Mind

変革の精神
Developing the Spirit of Change

【ミッション】

保健・医療・福祉の各サービスをシームレスに提供し、
地域住民の生涯に亘るニーズに応え支援を行う。

【サービス憲章と行動基準】

私たちは、質が高く効率的なサービスを提供するため、
グループの総力を挙げ(グループ連携)、地域の関係機関との連携を密にし(地域連携)、
他の関連事業との提携を展開し(業務提携)、患者様・ご利用者様との協同活動を通じて、
満足度の高い保健・医療・福祉サービスを目指します。

そのために…

1. 私たちは、患者様やご利用者様にとって最高の満足度を追求します。……………顧客満足
2. 私たちは、最高のサービス品質を追求します。……………品質管理
3. 私たちは、人権と倫理を尊重したサービスを提供します。……………人権尊重
4. 私たちは、地域社会の一員として遵法を徹底します。……………遵法精神
5. 私たちは、常に技術の向上と革新に努めます。……………技術変革
6. 私たちは、日々研鑽に励み、人格と知識の向上に努力します。……………教育研修
7. 私たちは、職種を越えたチーム活動に徹します。……………チームワーク
8. 私たちは、サービス提供に関わる情報を公開します。……………情報公開
9. 私たちは、各機関との地域連携を重視し地域に根ざすサービスを供給します。……………地域重視
10. 私たちは、環境を保護するためにあらゆる配慮を尽くします。……………環境保護
11. 私たちは、お互いを尊重し、ゆとりある職場環境を追求します。……………職場環境

溪仁会グループ CSRレポート2010

CORPORATE
SOCIAL RESPONSIBILITY
REPORT



編集方針

このレポートは、溪仁会グループが果たすべきCSR(社会的責任)を明らかにし、その実現に向けた取り組みを報告しております。

当グループのミッションは、「保健・医療・福祉の各サービスをシームレスに提供し、地域住民の生涯に亘るニーズに応え支援を行う」です。私たちの日々の取り組みは、果たしてこのミッションを果たすものになっているのか? 今年度のレポートでは、その検証を目的に、誕生、青年期、壮年期、高年期など、人の生涯にわたるニーズに当グループの取り組みを重ね合わせてご報告するページ構成としました。

当グループは、2006年度に5か年の中期経営方針を立て、その筆頭に「CSR経営の確立」を掲げました。その実践を総括する2010年度を迎えるにあたり、今一度その原点に立ち返ってみることで、今後のCSR活動の新たな展望につなげたいと考えています。

多くの皆さまに当グループの取り組みをご理解いただくことで、社会との相互信頼を深めることができれば幸いです。

信頼性への配慮

CSR分野に詳しい有識者の方々からいただいたご意見やアドバイスをもとに、公正な視点から情報公開をしております。第三者意見としては、昨年に引き続き東京交通短期大学学長の田中宏司氏に所見を依頼いたしました。また、当グループのWebサイト上でも、同内容の情報を公開しております。

CSRレポート掲載URL
<http://www.keijinkai.com>

報告対象範囲

当グループの2009年度(2009年4月～2010年3月)の活動を中心に、2008年度以前や2010年度の活動情報も記載しています。各施設の診療実績等のデータについては特に記載のない限り、2009年度のものであります。環境パフォーマンスデータの対象範囲については、溪仁会グループの中から環境保全上の重要度に応じて決めています。

CONTENTS

溪仁会グループがめざすCSRの姿 ……………P04

「ずーっと。」を支える組織として …………… P06

特集

皆さまの一生に寄り添う 溪仁会の「ずーっと。」

- 誕生～青年期 ……………P08
- 壮年期～中年期 ……………P12
- 高年期～ターミナル ……………P18

ステークホルダー・ダイアログ2010

私たちが考える理想の医療・福祉とは、
そして未来への展望とは ……………P24

各施設の取り組み

- 医療法人溪仁会 手稲溪仁会病院 ……………P28
- 医療法人溪仁会 手稲家庭医療クリニック ……………P30
- 医療法人溪仁会 札幌西円山病院 ……………P32
- 医療法人溪仁会 定山溪病院 ……………P34
- 医療法人溪仁会 溪仁会円山クリニック ……………P36
- 社会福祉法人溪仁会 ……………P38

グループ全体の取り組み

- 安全・安心なケアの実現をめざして ……………P40
- 活動への理解を深めていただくために ……………P42
- 職員一人ひとりの健康を守るために ……………P43
- サービスの質向上をめざして ……………P44
- 社会から信頼される組織であるために ……………P45
- 環境保全への取り組み …………… P46

トップメッセージ

溪仁会グループ最高責任者 医療法人溪仁会理事長 秋野豊明 …………… P48

第三者意見 ……………P50

今までも、これからも 私たち溪仁会グループは 地域の皆さまに寄り添って

溪仁会グループは、1979年の西門山病院開院以来、常に地域の皆さまの生命や暮らしに寄り添い続けてきました。先進的な高齢者医療への取り組みに始まり、社会福祉法人の設立による高齢者福祉とのかかわり、そして地域を支える総合的な医療体制づくりまで。保健・医療・福祉をつなぎ合わせながら、あらゆるケアを途切れることなく提供しています。

31年にわたる取り組みを支えてきたのは、「地域の保健・医療・福祉を支え、皆さまの幸せに貢献する」という揺るぎない使命です。理想とする保健・医療・福祉サービスを実現することで、地域から愛され、信頼され続ける組織をめざしています。

溪仁会グループのスローガンである「ずーっと。」には、たくさんの思いや決意が込められています。溪仁会グループとかわるすべての人のために、いつもそばにあり続ける存在でありたい。それが溪仁会グループのめざすCSRであり、理想とする「ずーっと。」の姿です。



生命の芽生えから 「ずーっと。」

生命が誕生する瞬間から、溪仁会グループは皆さまの健康を見守り続けています。病気の予防や治療、リハビリテーションや在宅ケア、そしてターミナルまで。皆さまの一生にかかわりながら、いつもそばに寄り添っています。



保健・医療・福祉にまたがる 「ずーっと。」

グループ内の各施設や法人が互いに連携しながら、「保健・医療・福祉」をつなぎ、切れ目のないサービスを展開していきます。皆さまが安心してサービスを受けられるように、スムーズな体制を築くことをめざしています。



いつまでも皆さまを支え続ける 「ずーっと。」

医療や福祉に取り組む者の責任は、確かな経営基盤を築き、地域社会を支える一員として存在し続けること。溪仁会グループでは、この先もずっと持続可能な組織づくりに取り組んでいきます。

溪仁会
グループの
CSR推進活動

職員一人ひとりの意識改革でCSR体制をより確かなものに

溪仁会グループでは、2006年にCSR経営宣言を行い、保健・医療・福祉分野における先駆けとしてCSRへの取り組みを始めました。

組織のCSR活動を支えるのは、一人ひとりの職員です。CSRへの理解を深め、実際の行動に反映できるように、CSR推進活動を継続して行っています。

その代表が本CSRレポートの発行です。グループにおけるCSRの理念や取り組みを組織内外に示すことで、職員の啓発や意識改革を促してきました。また、CSRをテーマにした研修会の開

催などを通して、CSRを組織に根付かせる取り組みを行っています。

具体的なCSR活動も積極的に展開しています。各種マネジメントシステムの認証取得やコンプライアンスの強化、医療安全活動など、保健・医療・福祉サービスの質を高め、社会から信頼されるために、努力と研鑽を続けています。

5年間の取り組みによって、職員の意識が大きく変化し、組織全体にCSR体制が浸透してきました。保健・医療・福祉に取り組む者の責任として、これからもCSR体制の整備と強化を進めていきます。

「ずーっと。」を支える組織として

保健・医療・福祉をつなぎ合わせながら、あらゆるケアを途切れることなく提供しています。

私たち溪仁会グループは、医療法人、社会福祉法人、ヘルパーサービス、福祉用具サービス会社の4法人を運営しています。病気を治すことだけでなく、健康維持のアドバイスや介護を含めた老後の安心のお手伝いまで、グループ内の法人や各施設が互いに連携することで、生涯にわたって必要とされる最良のサービスを提供しています。

治療とケア

乳幼児から高齢まで、幅広い疾患にわたって外来診療、在宅診療を行っています。また、最新医療技術と機器を備え、365日24時間の救急受入体制で地域の急性期総合医療・専門医療を担い、あらゆる疾患・外傷の患者さまを受け入れています。

- 総合医療 手稲溪仁会病院
- 総合医療 手稲溪仁会クリニック
- 家庭医療 手稲家庭医療クリニック



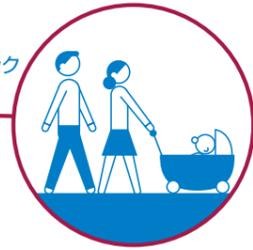
手稲溪仁会病院



保健

働き盛りの方々の健康のチェックと病気の早期発見、健康管理、予防に関するサービスを提供。安心して暮らせる地域医療のあり方を追求しています。

- 総合健診施設 溪仁会円山クリニック



在宅支援・生活支援

病気や障がいがあっても家で安心して生活できるよう、看護師がご自宅に訪問し、主治医の指示に基づき、医療処置や医療機器を必要とされる方の看護を行っています。また介護を必要とされる方のご家庭に訪問し、日常生活のサポートを行っています。

- 訪問看護ステーション(4事業所)
- 訪問介護(ホームヘルパーステーション)(8事業所)



ホームヘルパーステーションすまいる

介護

日常生活に常時介助が必要でご自宅では介護が困難な高齢者に入所いただき、食事・入浴・排泄などの日常生活の介護や健康管理を提供しています。

- 介護老人福祉施設 西円山敬樹園
- 地域密着型介護老人福祉施設 菊水こまちの郷



菊水こまちの郷

介護予防・在宅支援・通所介護

家庭で介護を必要とされる高齢者やそのご家族の方へのご相談に応じています。要支援、要介護と認定された40歳以上の方に、入浴や食事などのサービスを提供しています。

- 在宅介護支援センター(1事業所)
- 地域包括支援センター(2事業所)
- 介護予防センター(5事業所)
- 通所介護(デイサービス)(9事業所)
- 小規模多機能型居宅介護(1事業所)
- 指定居宅介護支援事業所(10事業所)



コミュニティホーム白石



カームヒル西円山

療養とケア

慢性期医療が必要な方に、看護・介護・リハビリテーションを中心とした医療サービスを提供しています。

- 療養病床 札幌西円山病院
- 療養病床 定山溪病院



札幌西円山病院



定山溪病院

福祉用具

福祉用具の貸与・販売、車いすのオーダーメイド制作や出張修理、住宅改修など、ご家族や介護を必要とされる方が快適な生活を過ごせるようサポートしています。

- 株式会社ハーティワークス

地域の皆さまとともに 溪仁会グループのあゆみ

1979年 6月 西円山病院 開院
 1981年 5月 定山溪病院 開院
 1982年 4月 西円山敬樹園 開所
 1987年 12月 手稲溪仁会病院 開院
 1989年 4月 コミュニティホーム白石 開所
 1990年 1月 溪仁会円山クリニック 開設
 1993年 1月 はまなす訪問看護ステーション 開設
 1994年 9月 西円山病院 老人デイケア施設基準認定
 10月 西円山敬樹園ホームヘルパーステーション 事業開始
 1995年 10月 コミュニティホーム白石ホームヘルパーステーション 事業開始

1996年 4月 カームヒル西円山 開所
 西円山敬樹園デイサービスセンター 開設
 11月 定山溪病院 老人デイケア施設基準認定
 1997年 4月 株式会社ハーティサポート 設立
 (2005年2月ハーティワークスに社名変更)
 1998年 4月 コミュニティホーム八雲 開所
 6月 株式会社ソーシャル 設立
 1999年 4月 デイサービスセンターすまいる 開設
 ホームヘルパーステーションすまいる 事業開始
 5月 訪問看護ステーションおおしま 開設
 12月 あおばデイサービスセンター 開設

2000年 1月 円山溪仁会デイサービス 開設
 2月 気仙沼市在宅介護支援センターおおしま 委託事業開始
 4月 コミュニティホーム美唄 開所
 居宅介護支援事業所 事業開始
 (西円山敬樹園、コミュニティホーム白石、やくも、すまいる)
 5月 手稲溪仁会クリニック 開設
 9月 デイサービスセンターおおしま 開設
 10月 グループホーム白石の郷 開所
 11月 デイサービスセンター白石の郷 開所
 2002年 4月 手稲溪仁会デイサービス 開設

2002年 7月 グループホーム西円山の丘 開所
 8月 豊平溪仁会デイサービス 開設
 新琴似溪仁会デイサービス 開設
 2003年 4月 訪問看護ステーションあおば 開設
 青葉ハーティケアセンター 開設
 2004年 9月 コミュニティホーム白石 ショートステイセンター 開所
 2005年 3月 手稲溪仁会病院 新型救命救急センター 設置許可
 4月 ドクターヘリ正式運航開始
 8月 おおしまハーティケアセンター リニューアルオープン

2005年 10月 在宅ケア事業本部 設置
 (2007年4月 在宅ケア事業部に名称変更)
 2006年 4月 札幌市白石区第1地域包括支援センター事業開始
 介護予防センター 事業開始
 (ままだ、定山溪、円山、曙・幌西、白石中央)
 2007年 4月 ケアセンターこころ 開所
 コミュニティホーム岩内 開所
 5月 手稲溪仁会病院 救命救急センター棟 オープン
 7月 地域密着型介護老人福祉施設 菊水こまちの郷 開所
 小規模多機能型居宅介護 菊水こまちの郷 開設

2008年 4月 岩内町地域包括支援センター 事業開始
 居宅介護支援事業所ケアプランセンター 事業開始
 2009年 4月 社会福祉法人南静会 「社会福祉法人溪仁会」へ名称変更
 10月 手稲家庭医療クリニック 開院
 11月 西円山病院「札幌西円山病院」へ 病院名称変更
 2010年 7月 手稲溪仁会病院 NICU 開設
 10月 訪問看護ステーション岩内 開設
 泊村立茅沼診療所 指定管理者として運営開始

誕生～青年期

周産期から育児、そして少年・青年期まで、お子さまのすこやかな成長は、誰もが願うことです。最新の医療技術だけでなく、思いやりの心も大切にしながら、溪仁会は大切な生命の成長を見守り続けます。

小さな生命を救うために ～NICUの開設

[手稲溪仁会病院 小児科]

社会問題にもなり、たびたびマスコミなどでも取り上げられる「リスクのある妊婦のたらい回し」や「新生児や小児急患の受け入れ拒否」の事例。手稲溪仁会病院の小児科では、こうした事態を少しでもなくすために、NICU（新生児特定集中治療室）の開設をめざしてきました。

新生児医療に特化した 集中治療室の必要性

新生児医療は受け皿となる施設が十分に整備されておらず、都市部の札幌市でさえ、患者さまの受け入れができないという問題が起きています。これには、本来なら重症を専門とすべき病院の基幹NICUが、軽症から重症までを対象にせざるを得ないという背景があります。

手稲溪仁会病院は、年間分娩数は450程度と周産期施設としては中規模ですが、周産期二次救急拠点病院のため、ときには疾患のある新生児を受け入れ、そのつど小児科の医師やスタッフが対応に当たってきました。しかし、新生児については専門の医療設備やスタッフが十分とはいえず、「新生児を専門とするNICUをつくらう」という機運が、院内で高まっていました。小児科では3年前からNICUの開設準備に取り組み、施設整備やスタッフの教育を進めてきました。

地域の病院との連携を進め 新生児医療への貢献をめざす

2010年7月1日、産婦人科フロアの一角にNICUが誕生しました。わずか3床からのスタートですが、「小さな赤ちゃんや妊婦さんのたらい回しを、少しでもなくしたい」という、スタッフの希望と熱意が込められています。

しばらくは経験やノウハウを培うために、主に比較的軽い急性期疾患を対象に、基幹NICUの機能を補っていくような新生児医療を展開する予定です。また、これまでは少なかった地域の産科病院との連携体制を築くことで、軽症なケースでも、迅速かつ適正な医療が受けられる環境づくりをめざしています。



子どもの生命を守るため 小児医療の拡充も視野に

現在は専任の医師と看護師に加え、小児科医がサポートしながら、24時間体制で赤ちゃんの診療を続けています。施設としては小規模ですが、充実した医療体制を整えています。

手稲溪仁会病院は小児救急の拠点病院でもあることから、今回のNICUの開設をきっかけに、将来はPICU（小児集中治療室）にもつなげていく構想があります。小さな生命を守るための「最後の砦」として、トップレベルの医療施設をめざす取り組みが続きます。

**いつかは日本の小児急性期医療を
リードする存在に**

手稲溪仁会病院
NICUセンター長 **南雲 淳**

当院は、ICUや救命救急センター、ドクターヘリ基地など最先端の医療施設を備えています。そのような高度医療を行う基幹病院として、NICUの開設は必然でした。

当院は小児科医の育成施設でもあり、若い研修医がさまざまな小児の急性疾患を学ぶ場としても、NICUの存在が非常に重要になってきます。積極的に近隣病院への周知活動を行うことで、できるだけ多くの病気を抱った赤ちゃんを受け入れ、他院の基幹NICUをサポートしながら、スキルアップを図っていきたく考えています。

夢は、北海道、さらに大きなことを言えば日本の小児急性期医療をリードするような小児科となること。NICUはその第一歩です。いつか「札幌にトップレベルの小児医療を提供する病院がある」と言われるように、質の高いトータルケアができる医療環境をつくりたいと考えています。

身体に負担の少ない呼吸器治療を ～小児NIVの取り組み

[手稲溪仁会病院 小児NIVセンター]

手稲溪仁会病院では、呼吸補助が必要な疾患を持つお子さんに対して、鼻マスクによるNIVという治療方法を導入し、その効果を実証してきました。小さなお子さんの呼吸器治療に新たな可能性を開く、小児NIVのこれまでの取り組みと展望をご紹介します。

全国に先駆けて 小児へのNIVを導入

脳性マヒや神経筋疾患などにより、呼吸が十分にできないお子さんの呼吸補助は、多くの場合、気管内挿管や気管切開といった方法がとられています。しかし、小さな体への負担が大きく、発声や食事、行動範囲の制限など、生活の質の低下が課題となっています。

長期の入院を強いられる小児患者さまの生活の質を向上させ、自宅への早期復帰をサポートするために、手稲溪仁会病院では2006年から「非侵襲的換気補助療法（Noninvasive ventilation）」、通称「NIV」という治療法を実施してきました。NIVとは、鼻にマスクをつけ、チューブを介して人工呼吸器による呼吸補助を行うもの。大人では標準的な治療となっていますが、小さなお子さんの場合、マスクをはずしてしまう、サイズの合うマスクや人工呼吸器が少ない、といった問題からなかなか普及が進んでいませんでした。全国でも小児NIVを導入している医療機関はわずか、というなかで、お子さんの笑顔を取り戻す取り組みがスタートしました。



小児NIVセンターの設立で 治療法の普及をめざす

NIVの対象となる小児患者さまは予想以上に多く、QOL（Quality of Life: 生活の質）が大幅に改善される方もいました。2008年4月には「小児NIVセンター」を開設し、専任の医師や理学療法士によるケアを開始。在宅でのNIV使用のサポートにも力を入れ、ご家族向けのマニュアル作成や定期的な往診などによって、在

宅ケアの環境整備を進めてきました。

NIV導入から携わってきた土島智幸同センター長は、「小児NIVは入院患者さまの生活を一変させました。月に1回は入院が必要だった4歳の女の子のケースでは、NIVを実施したところ年に1回の検査入院だけになりました。今では学校にも通えるようになりました」とその有効性を力説します。



土島智幸小児NIVセンター長

在宅ケアが可能な患者さまが増えたことから、現在は訪問診療に重点を置いた活動を行っています。

全国から注目を集める 先進的な取り組み

小児NIVセンターには、北海道だけでなく日本全国から相談や問い合わせが入ります。土島センター長は、その一つ一つに丁寧に答え、必要があれば主治医と連絡を取って、治療方針などについて話し合います。「できるだけ多くの人にNIVについて理解してもらい、導入を促したい」というのも同センターの目標の一つです。

将来は小児NIVセンターを発展させて全国的なネットワークを築き、お子さんの在宅ケアを推進する拠点「小児在宅医療センター」に一。小児医療の明るい未来に向けたビジョンの実現に、これからも取り組み続けていきます。

■これまでの実績（2006年4月～2010年3月）

急性期	在宅導入数	訪問診療症例
120症例 (挿管回避率85%)	40名	20名

交流が広がる家族交流会「ぞうさんnet。」

NIV治療を受ける小児患者さまのご家族の交流の場となっているのが「ぞうさんnet.」です。参加した保護者の方々は食事をしながら近況報告や情報交換などを行います。また、その間は小児NIVセンターのスタッフがお子さんたちを見守り、コンサートやものづくり体験などを楽しんでもらいます。こうした活動は、保護者同士の横のつながりをつくるのに役立っています。



特集「誕生～青年期」

特集「壮年期～中年期」

特集「高年期～ターミナル」

ステークホルダーダイアログ

各施設の取り組み

グループ全体の取り組み

トップメッセージ

特集「誕生～青年期」

特集「壮年期～中年期」

特集「高年期～ターミナル」

ステークホルダーダイアログ

各施設の取り組み

グループ全体の取り組み

トップメッセージ

誕生～青年期

出産前から産後まで一貫してサポート ～助産師外来の実施

[手稲漢仁会病院 産婦人科]



「妊娠の小さな悩みや疑問をもっと気軽に相談できたら」。そんな妊婦さんの思いに応じて、手稲漢仁会病院では、2010年6月10日より「助産師外来」を開始しました。妊婦健診から保健指導、出産介助、産後健診まで、一貫してかかわることができる助産師が中心となり、正常な妊娠や出産をサポートするのが「助産師外来」です。

妊娠期はささいなことでも不安になるもの。医師による健診の場合、なかなか時間にゆとりがなく、妊婦さんも気軽に質問しにくいという現状があります。そのため、産婦人科では、2009年からプロジェクトチームを立ち上げ、助産師外来の開設準備に取り組んできました。同科の高橋ゆう子師長は、「当院には27名の助産師がいます。その力を活用して、じっくりと妊婦さん一人ひとりに合わせたサポートを行いたい」と話します。

助産師外来は毎週木曜日の13時30分～17時、事前予約制で実施しています。まだ始まったばかりですが、毎回2、3名の利用があり、定期健診を通して妊婦さんと助産師がふれ合う機会になっています。「妊婦さんとともに悩み、考えることで助産師も成長します。妊婦さんの声を取り入れながら、より安心していただけるケアをめざしたい」と高橋師長。周産期の妊婦さんを支える存在として、助産師の力が発揮されています。



高橋ゆう子師長

快適にお産をしていただく環境を ～LDR施設とお祝いディナー

[手稲漢仁会病院 産婦人科]

手稲漢仁会病院の産婦人科では、妊婦さんの要望を細かくヒアリングしながら、その方に合った分娩プランを作成し、トータルでサポートしています。

さまざまな分娩スタイルへの対応もその一つです。3室ある分娩室は、陣痛・分娩・回復までを個室で行う*LDRルームとなっています。家庭的な温かみのあるインテリアの室内が分娩室に早変わりし、そのまま分娩できるため、移動の負担などがなく、リ

ラックスして出産に臨めます。アロマテラピーによる自然な和痛分娩やご家族の立ち会いなど、自宅のような環境で過ごせるのも特徴で、ストレスを和らげる効果もあります。

分娩スタイルも側臥位や四つんばいなど、妊婦さんの個性や要望に合わせています。また、LDRの他に畳敷きのフラットルームもあり、そうした環境で分娩を望まれる方にも対応しています。

出産後は、お祝いディナーを用意。ご家族一緒に、レストランで会食していただくことも可能です。

大切な生命の誕生の瞬間を、より快適に、より安全に。いつまでも心に残る思い出となるよう、サービスの充実を図っています。

*LDR＝英語のLABOR（出産）、DELIVERY（分娩）、RECOVERY（回復）の頭文字をとった言葉



病棟の子どもたちに笑顔を届ける ～ホスピタル・クラウン

[手稲漢仁会病院 小児病棟]



入院している子どもたちは、外の世界とふれ合う機会が少なく、生活も単調になりがちです。そうした子どもたちのもとを訪れ、笑顔や笑い声を届けているのが「ホスピタル・クラウン」です。

クラウン (clown) とは道化師のこと。日本ではピエロとして親しまれています。「ホスピタル・クラウン」は会話や手品などを通して、患者さまが自発性や社会性を取り戻すお手伝いをしています。

訪問前に看護師たちと打ち合わせを行い、患者さまの体調を確認するなど、子どもの個性や病状に合わせた活動を行います。

手稲漢仁会病院の小児病棟には、2009年9月から、定期的にホスピタル・クラウンたちが訪れています。次々に披露される楽しいパフォーマンスや、コミカルなクラウンの動きに、入院している子どもたちの表情もパッと明るくなります。長い闘病を余儀なくされる患者さまにとって、ホスピタル・クラウンの訪問は、子どもらしさを



取り戻せる楽しい瞬間なのです。

少しでも患者さまに安らぎや喜びを感じていただき、治療に臨んでいただけるように、これからもさまざまな工夫を行っていく予定です。

未来の看護師のタマゴと交流 ～ふれあい看護体験

[手稲漢仁会病院 他]

漢仁会グループでは、毎年5月の「看護週間」中に、看護の心を育むための活動を行っています。今年も、手稲漢仁会病院と定山漢仁会病院において、看護体験のイベントを実施しました。

手稲漢仁会病院では、5月12日に札幌手稲高校から看護分野への就職をめざす生徒を迎え、「ふれあい看護体験」を実施。3年生9名が参加して、消化器科、整形外科、産婦人科、小児科の4病棟をそれぞれ体験しました。この取り組みは17年目を迎える恒例のイベントになっており、参加者の中には高校を卒業後、看護師になって手稲漢仁会病院のスタッフになった人もいます。



小松みなみ看護師

今春入職した小松みなみ看護師もそうした一人。高校3年生の時に「ふれあい看護体験」に参加して、大きく意識が変わった、と言います。「それまでは、漠然と看護師に憧れていたのですが、実際に仕事を体験してみて、イメージが変わりました。楽な仕事ではないとわかっていましたが、看護師の方が働く様子を間近で見て、

苦労がある以上にすばらしい仕事だ、と感じました。これが後押しになり、将来は看護師になろう、と決めました」

こうした取り組みによって、看護への理解を深め、多くの方に関心を持っていただけるように、漢仁会グループではさまざまな啓発活動にも取り組んでいます。



壮年期～中年期

人生の経験を重ね、忙しくも喜びや生きがいを感じる時。一方で、健康への意識が高まり始める年代でもあります。最先端の治療から健康づくりのアドバイスまで、溪仁会は安心して暮らせる地域医療のあり方を追求します。

希望のあるがん治療に向けて ～地域がん診療連携拠点としての取り組み [手稲溪仁会病院]

手稲溪仁会病院では、「がん治療管理センター」の設立に続いて「地域がん診療連携拠点病院」の指定を受けるなど、がん診療における体制強化が進められています。患者さまにとって最適な治療をめざす、がん診療への取り組みをご紹介します。



患者さまの視点に立った 全人的なケアを実践

手稲溪仁会病院は、2008年に「がん治療管理センター」を立ち上げ、適切な診断から治療、看護、ケアまでを継続的に実施するための体制を強化してきました。

同センターには、通院での治療を行う「外来化学療法室」、治療に伴う心身の痛みを和らげる「緩和ケア室」、患者さまやご家族への相談業務やセカンドオピニオン外来についての相談などを担当する「がん相談支援室」、患者さま情報の集計と分析によって早期発見や治療効果の向上につなげる「医療情報・がん登録統計室」の4つの部署があります。また、複数の科の医師や看護師による「がん相談支援室」を開催し、患者さまの症状や治療方針などについて、意見交換や検討、情報共有を行っています。

こうしたきめ細かな取り組みによって、患者さまを全方的にサポートできる環境づくりをめざしています。センター長を務める熊谷章副院長は、「がん治療の多くは、長いケアが必要になります。患者さまに安心して治療に臨んでいただくには、疾患だけを見るのではなく、全人的な支援を行うべきだと考えています」と話します。



熊谷章副院長

地域医療の拠点として 最善のがん治療をめざす

がん診療の実績から、2009年4月に「地域がん診療連携拠点病院」の指定を受け、がん診療における地域の拠点医療機関としての活動もスタートしました。同院では、これまで他の医療機関との地域医療連携を推進してきましたが、5大がんの連携

パスが将来的に導入されることをふまえ、がん診療においてもネットワークの構築を進める計画です。熊谷副院長は「そのためには、他の医療機関にも、当院のがん診療への取り組みを知ってもらい、信頼関係を築くことが重要」と、啓発活動や情報提供にも力を入れていきたいと話します。

将来は、がん検診ができる施設を備え、院内で一貫したケアを提供したい、と熊谷副院長。「目標は、手稲溪仁会病院がんセンター。それには、医療サービスやスタッフのスキルの向上など、中身を充実させることが必要です。患者さまや他の医療機関に選んでいただける医療環境をめざし、病院全体で努力していきます」



治療と自宅での生活を両立させる 外来化学療法室の取り組み

手稲溪仁会病院
外来化学療法室マネージャー 東谷朗子

仕事を続けている人など、入院せずにがん治療をする患者さまのため、2007年に外来化学療法室が設置されました。患者さまの不安・負担を軽くできるよう、治療開始前には薬の副作用などについてオリエンテーションを、開始後は同意を得られた方に電話でフォローアップを行っています。

がん治療は日進月歩なので、学習会を積極的に開き、最新の知見にふれ続けたいと思います。また、他職種とかわりながら、安心できる治療を届けたいです。



人生に寄り添う家庭医として ～「かりんば」の開設

[手稲家庭医療クリニック]

「手稲家庭医療クリニック」愛称「かりんば」は、誕生から1年が経ち、地域の人たちの間に少しずつ浸透してきています。日本ではまだなじみの少ない「家庭医」という存在、そして、地域の人たちの健康を広くにわたって支えるかりんばの役割。これまでの活動を通して、その意義を考えます。

地域医療を支える 新しい取り組み

「家庭医」とは、症状や治療方法、年齢や性別にかかわらず初期診療を受け持ち、地域の人々の健康を守るかかりつけ医としての役割を果たします。2009年10月に開設した手稲家庭医療クリニックは、外来や在宅を中心に、産婦人科から小児科、一般内科まで、家庭医による幅広い診療を行う施設。人々が安心して暮らせるように地域に密着した医療を提供しています。

特徴は、生まれたばかりの新生児から100歳を超える高齢者まで、あらゆる年代の方を対象に、広範囲な医療体制を整えていること。カゼや腹痛といった日常的な症状だけでなく、高血圧や糖尿病などの慢性疾患、妊婦健診やがん患者さまの緩和ケア、ワクチン接種や禁煙外来といった予防まで、充実した外来医療を行っています。

また2階には、予後の限られた患者さまの入院病棟もあり、生命の始まりから最期の瞬間までかかわることができるのも大きな特徴です。こうした医療機関は日本ではめずらしく、地域医療を支える新しい取り組みとして、大きな期待と注目を集めています。

在宅診療の拡充や 家庭医の養成も大きな柱

同クリニックでは、在宅診療への取り組みも重視しています。小嶋一院長は、「ご自宅での看取りも含め、患者さまやご家族が安心して過ごすことができるよう、24時間体制で対応しています。北海道は介護施設などが充実していることもあり、他の都府県



小嶋一院長

に比べ自宅での最期の時間を過ごされる方は少ないのですが、しっかりとしたサポート体制を持つことで、選択肢を増やすことができるのです」と、在宅診療の意義を語ります。

また、研修医を育て、未来の家庭医としてのスキルを積むことも狙いの一つ。小嶋院長を含めた2名の指導医が中心となり、家庭医の養



成に取り組んでいます。研修医たちは、最初のうちこそ、次々に違った症状や年代の方が受診されるのにとまどっていましたが、患者さまからいただく感謝の言葉や笑顔にやりがいを見出しています。患者さまと密接にかかわりながら、継続的なケアを行うことが、実践と振り返りの場にもなっています。

見えてきた課題と 未来への展望

開設して1年あまりが経ち、課題も見えてきたところです。その一つが、同クリニックの取り組みを理解してもらうための周知活動。「認知度はまだまだ低い」と小嶋院長は、積極的な広報活動の必要があると言います。患者さま同士の口コミによる来院が増えていますが、実績を重ねることで、将来は、周辺の医療機関との連携体制も構築する予定です。

将来的には、予防事業の充実や健康増進の啓発活動も行っていきたい、というのが小嶋院長のビジョン。「挑戦したいこと、開拓したいことはたくさんあります。当クリニックには、無限の可能性があると思います。地域の人たちがふらりと立ち寄って、情報交換ができる。そんな場所になることも、家庭医療の一つの在り方ですね」

■開設からの延べ来院者数 (2009年10月～2010年3月)

外来	在宅(一般)	在宅(グループホーム)	入院
4,516人	151人	276人	1,312人



壮年期～中年期

トップレベルの医療への挑戦 ～消化器医療の実績

[手稲漢仁会病院 消化器病センター]



手稲漢仁会病院の消化器内科では、1997年に開設された消化器病センターによる専門性の高い医療を提供しています。診療体制は、消化管、胆・膵、肝臓の3グループに分かれ、それぞれに特化した治療を展開。患者さまの身体に負担の少ない検査・治療方法の確立や、最先端のがん治療の実施など、新しい取り組みに挑戦しています。

■主な検査・治療実績 (2009年4月～2010年3月)

総内視鏡検査・治療	13,491件
上部消化管内視鏡	7,269件
上部消化管内視鏡的切除術	82件
下部消化管内視鏡	3,789件
下部消化管内視鏡的切除術	558件
ERCP関連手技	919件

地域の医療機関とともに未来をめざす ～地域医療連携の取り組み

[手稲漢仁会病院]

医療連携とは、各医療機関がそれぞれの特性を生かしつつ、役割を分担しながら、連携して治療やケアにあたる医療体制のこと。患者さまは効率的かつ的確な診療を受けられるようになり、各医療機関の機能も有効に活用できるシステムとして、浸透してきています。

手稲漢仁会病院は、地域の基幹病院として、主に急性期医療を受け持っています。そのため、回復期や慢性期の患者さまについても、一貫した医療サポートが受けられるように、他の医療機関と協力体制を築いています。

現在は手稲区・西区を中心に、札幌全域や石狩市、後志地

域との医療連携も重視し、札幌市やその近郊だけでなく、全道各地の医療機関と協力体制を構築。検査数や治療数も実績を着実に伸ばしており、そうした臨床データの蓄積による症例の検討・分析にも役立っています。

2010年度中に内視鏡室を増設する予定で、さらに診療体制が強化されます。疾患の早期発見や患者さまに合った適切な治療を、確実かつスピーディに。消化器病分野をリードするための取り組みが続きます。



新しい価値を切りひらくために
日本のトップから世界をめざす

手稲漢仁会病院
消化器病センター長 真口 宏介

13年前に消化器病センターを開設したことによって、当院の消化器医療は飛躍的に進化しました。例えば、内視鏡検査と治療の総件数を見ても、それまでは年間3,000件ほどだったのが、センター開設後1年で、10,000件を超えるまでに。こうした劇的な変化を遂げることができたのは看護師をはじめとしたスタッフの努力が大きく、目に見える成果を上げることでさらに意識が高まってきました。

センターの開設以来、より効果的で効率的な治療を追求し、現在は幅広い症例に対して実績を上げています。また、人材育成や外部との交流にも力を入れており、学会発表や院外研修などによって得た経験や知識を現場にフィードバックできる体制を築いています。

当センターの目標は、「大学や地域にとらわれない、全国レベルの消化器病センター」。そのためにも、スタッフ全員が常に上をめざし、やがては世界のトップとなるような医療体制に向けて努力しています。

提携医療機関数	206件(2010年9月現在)
紹介数	16,066件(2009年4月～2010年3月)
逆紹介数	6,920件(2009年4月～2010年3月)

一人でも多くの患者さまを救うために ～救急医療への取り組み

[手稲漢仁会病院 救命救急センター]

手稲漢仁会病院の救命救急センターには、年間2万人を超える救急患者さまが来院します。高度救命救急医療が必要な重症者だけでなく、中等症から軽症の方も受け入れているため、患者さまの数は増える傾向にあります。

同センターは2005年に開設され、2007年5月に新救急棟が完成。ベッド数の増床や医療設備の整備など、高度な救急医療に対応できる環境を整えてきました。さらにドクターヘリの基地も擁し、民間病院ながら充実した施設を備えているのも特徴です。

診療体制は、専属医師を中心に初期診療・治療を行い、必要



■患者数の推移(搬送実績)

	2007年度	2008年度	2009年度
救急車(入院)	4,116(1,852)	4,000(1,860)	4,539(2,060)
独歩来院(入院)	19,116(1,561)	18,850(1,488)	22,065(1,528)
合計(入院)	23,232(3,413)	22,850(3,348)	26,604(3,588)

北海道の救命救急医療の向上を支える ～ドクターヘリの実績

[手稲漢仁会病院 救命救急センター]

ドクターヘリとは、救命救急措置を必要とする現場へ急行し、救急専門医と看護師による迅速な治療開始を図る救急医療専用ヘリコプター。同時に、医療機関への搬送時間を短縮するという役目もあります。

手稲漢仁会病院では、2005年3月の救命救急センターの設置を経て、同年4月にドクターヘリの基地病院に指定され、本格運航を開始。一刻一秒を争う救急現場において患者さまの生命を救う活動を続けてきました。現在、運航圏域は道央圏および手稲漢仁会病院を中心にして半径100キロメートル圏内となっています。

2009年度には、旭川市と釧路市においてもドクターヘリの運

にに応じて各診療科に振り分けます。時間外においても、救急科当直医と各科の当直医が連携し、原則としてほとんどの疾患や外傷に24時間体制で対応します。

院外においても、地域の災害訓練に参加するなど、救命救急への理解を促す活動も行っています。スタッフのスキル向上や医療体制の整備を図り、すべての救急患者さまを受け入れられる環境づくりを続けています。



救命救急の拠点病院を視野に
手稲漢仁会型の医療体制を築く

手稲漢仁会病院
救命救急センター長 高橋 功

当センターは、新型の救急医療設備やドクターヘリの基地を備え、重症者にも対応可能な体制を整えています。救急分野での歴史はまだ浅く、実績不足は否めませんが、当院ならではの長があります。それは、軽症者であっても対応するという。マンパワー不足といった問題がありますが、可能な限りあらゆる患者さまを引き受けるように努力しています。当センターでは、昨年から研修医のコースが新設されたことで、若いスタッフへの期待が高まっています。救命救急の現場で対応力とたくましさを身につけ、救急医療の第一線で活躍してほしいと考えています。

将来構想は、より深く治療にかかわる体制を築くこと。初期診断だけでなく、治療にも積極的にかわるというのが理想です。アメリカ型のERと日本の救命救急を合わせたような、手稲漢仁会病院独自の医療体制を実現し、救命救急の拠点病院となることをめざしています。



■道央ドクターヘリ 出動件数

2005年度	261件
2006年度	389件
2007年度	453件
2008年度	430件
2009年度	410件

壮年期～中年期

不健康な習慣を“治療する” ～生活習慣病外来・禁煙外来の開設

[溪仁会円山クリニック]



溪仁会円山クリニックは、健診事業に特化した医療機関として地域の健康を支えてきました。特に各種人間ドックや、年齢やライフスタイルに合わせた婦人科検診など、健康管理から病気の早期発見に至るまで、受診される方の要望に沿って多彩な検査項目を提供しています。

近年、健康への関心が高まるにつれ、健診結果を活かした“指導”の重要性が増しています。そこで2010年6月1日、「生活習慣病外来」と「禁煙外来」を開設しました。健診から外来による予防・治療まで一体化したサービスを提供することで、もっと多くの人に生活習慣の改善に取り組んでいただくのが外来設置の狙いです。

「生活習慣病外来」は、医師の診療を中心に、保健師や管理栄養士、健康運動指導士などのスタッフが直接指導に当たります。体の変化や成果を医学的に示すなど、特定保健指導よりも踏み込んだ説明・指導を行います。

「禁煙外来」では、12週間の禁煙治療プログラムの中で、「や



めたいけど、やめられない」という人の精神面のサポートを重視します。内服薬やニコチンパッチなどを併用しながら無理のない禁煙を実行・継続します。

外来による指導で、病気の予防を強化し、さらに地域への貢献を続けていきます。

生活習慣病外来プログラム～栄養・運動～ 糖尿病、高血圧症、脂質異常、動脈硬化などの生活習慣病やその合併症の予防に向けたプログラムです。



巡回バスで遠隔地もフォロー ～地方健診への取り組み

[溪仁会円山クリニック]

広い北海道の中では、地方によっては健診を実施する医療機関や施設が近くにはないという理由で、健診をなかなか受けられない方がいます。検査の機会が少ないことは、病気の早期発見が難しくなり、大きな健康上のリスクにさらされていると言えます。

溪仁会円山クリニックでは、そういった地方に住む方々の健康を支えるため、道内の自治体や事業所などからの要請によって健診バスを派遣し、巡回健診を行っています。バスには胃部や胸部のX線、心電図、超音波(エコー)などの検査機器を搭載し、迅速で正確な検査を提供しています。



自宅での暮らしの“安心”を支える ～福祉用具の販売・レンタル

[株式会社ハーティワークス]

病気や事故などで思い通り体が動かなくなったとき、その後の生活を支えるのが車いすなどの福祉用具です。株式会社ハーティワークスでは、用具選びや住まいの改修を中心に、安心して生活できる環境づくりをサポートしています。

専門知識を持つ相談員が 福祉用具選びをお手伝い

介護が必要な方や障がいのある方が「自分らしく」生活を送るためには、それぞれの方の症状や住まい・暮らしの状況に合わせて、車いすや歩行器、介護用ベッドなどさまざまな福祉用具が必要になります。また、住まいに関しても、段差の解消や床材の変更、手すりの設置などの改修をしなければいけません。

株式会社ハーティワークスでは、ホームヘルパー1・2級、介護支援専門員などの資格を持った「福祉用具専門相談員」などの専門スタッフが、ご利用者さまの自宅にうかがって相談を受け、用具選びや住まいの改修をお手伝いしています。また、福祉用具についてはデモ品を揃え、選ぶ前に試用できるようにしています。

車いすについては、一人ひとりの体型や身体能力、持ち運びをするかどうかなどライフスタイルの違いによって、必要な機能などが大きく変わってきます。そのため、各ご利用者さまのニーズに合わせて、フルオーダーでの車いすの製作や、修理・改造・メンテナンスを提供しています。



介護保険による補助制度の 利用もサポート

また、介護保険・身障制度によって、主要な福祉用具の購入・レンタル費用や住宅改修の費用の補助が受けられる場合があります。これらの制度の利用などについても、相談・支援を行っています。

さらにこれらの制度や、制度の対象となる商品については、広報誌「ハーティワークス通信」を発行してお知らせしています。広報誌の中では、新商品や季節商品などについても特集を組み、紹介しています。



株式会社
ハーティワークス
営業部長 小林 隆

お客様の深い感謝の気持ちに誠実さで応えていきたい

私はいくつかの勤め先を経て、2000年にハーティワークスに入社しました。介護・福祉の現場は今も昔も人材が不足しています。その中で、自分の家族もいずれ介護・福祉を必要とする時が来るかもしれない、それなら私がその一端を担えば、家族を助けることにもなると思い、この仕事を一生の仕事にしようと思いました。

福祉用具の営業職となって感じたのは、他の営業職よりももっと、お客様の感謝の気持ちを強く感じる仕事だということです。私がこの仕事を始めて間もないころ、あるお客様

が私に向かって「わざわざ来てくださって本当にありがとうございます」と、正座をしたまま深く頭を下げられたことがあります。その出来事を思い出すたびに、営業職の本質である“誠実さ”を忘れてはいけないと私はえりを正します。お客様の気持ちに向き合うこと、そしてコミュニケーションから生まれる信頼関係が何よりも大切です。これからも、自分もご利用者さまの家族だというくらい、気持ちに近づいたサービスをお届けしていきたいと思っています。

特集「誕生～青年期」

特集「壮年期～中年期」

特集「高年期～ターミナル」

ステークホルダーダイアログ

各施設の取り組み

グループ全体の取り組み

トップメッセージ

特集「誕生～青年期」

特集「壮年期～中年期」

特集「高年期～ターミナル」

ステークホルダーダイアログ

各施設の取り組み

グループ全体の取り組み

トップメッセージ

高年期～ターミナル

「いつになっても、自分らしく生きていきたい」。そう願う人が増えています。年を重ねてきた方々が、安心して暮らせるように、溪仁会は、充実した医療・福祉サービスを提供しています。

患者さまの命を見守り続けて～終末期医療への取り組み

[定山溪病院]

長期にわたって療養される高齢の患者さまが多い定山溪病院では、終末期医療(ターミナルケア)のあり方について早くから検討を行ってきました。患者さまやご家族にとって望ましい終末期医療の姿とは。その答えを追い続ける定山溪病院の活動を、ご家族の声とともにご紹介します。

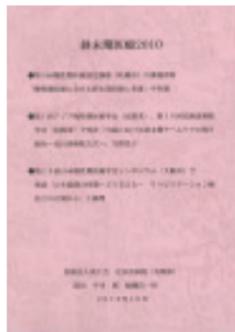
すべての職種がかかわりながら終末期医療のあり方を模索

2000年の介護保険導入以降、定山溪病院ではお亡くなりになれる方が増える傾向にあります。特に70歳以上の高齢の方が療養病床で亡くなる割合が高く、定山溪病院では「望ましい終末期医療とは」というテーマについて病院全体で考え、模索してきました。

取り組みの始まりは、1997年4月から2年間にわたって行われた「ターミナル検討会」でした。医師と看護師の役職者が、終末期を迎えられた方への対応や、亡くなられた方への医療・看護・介護サービスの内容を話し合う場を設け、情報を共有しながら終末期医療に取り組む体制を築きました。現在は、各病棟で「ターミナルケアカンファレンス」を実施し、リハビリ職や介護職、管理栄養士、メディカルソーシャルワーカー(MSW)など、治療・ケアにかかわる全職種が参加して、個別の患者さまごとに、ご本人とご家族が望まれる終末期医療の内容を検討。できるだけご希望に添ったサービスを提供しています。また、患者さまが亡くなられて2週間以内に「死亡後カンファレンス」を開催し、提供した終末期医療について反省や評価を行っています。

患者さまとご家族の思いを受け止めるために

終末期を迎えられた患者さまとご家族の思いを確認するために、2004年から始めたのが「終末期の意思確認」です。終末期のあり方について十分に話し合い、意思の疎通がはかれた患者さまやご家族に対し、終末期医療の内容を選択する用紙へのご記入をお願いして



います。タブー視されがちな終末期について、患者さま側と病院側がしっかりと話し合うことで、満足していただける環境づくりをめざしています。

こうした終末期医療への取り組みは、年に一度、冊子にまとめて発表しています。他の医療機関からの関心も高く、終末期医療のモデルケースとして、社会的にも注目を集めています。

ご家族の声に支えられて「定山溪病院方式」を追求する

ご家族からも、さまざまな反応をいただいています。奥様を取られた方からは、「スタッフの皆さんに温かく接してもらい、静かな療養環境もあって、私も本人もとても安堵しました。終末期についての説明もきちんとして、病院の姿勢に信頼を感じました。本人もきっと満足できるかたちであったと思います」という感想をいただきました。また、お父様を取られた方は「病気ばかりではなく、本人の状態を診てくれたところに、他の病院との違いを感じました。亡くなった後も、スタッフの方々が勤務の合間に病室を訪れてくれて、顔を見せてくれたのが心に残りました」と話されています。

日本では、終末期医療に正面から取り組む病院はまだわずかです。「定山溪病院方式」とも呼ばれる終末期医療への取り組みは、これからも続いていきます。



「生命に寄り添うこと」それが当院の終末期医療のあり方

定山溪病院 経営管理部医療福祉課長 菊地 攻

終末期医療というのは「これが理想」という形があるわけではなく、とてもデリケートな部分です。大切なのは、患者さまやご家族の意思を尊重し、お気持ちをくみ取ること。そのためのコミュニケーションをこまめに行うようにしています。

数年前からは、亡くなられた患者さまのお見送りを、正面玄関から行っています。事務職員も含め、多くのスタッフが立ち会うことで、病院全体で「生命を終えられた方を敬う気持ち」を現すこととしています。

当院の終末期医療は「生命に寄り添うこと」だと考えています。誰もが満足できる在り方を、病院全体でめざしています。

ターミナルの現場から～終末期ケアへの対応

[手稲家庭医療クリニック]

手稲家庭医療クリニックには、予後の限られた患者さまのためのセカンドケアハウスや、ご自宅でのケアを支える訪問看護ステーションが併設されています。最期の瞬間まで、その人らしくあるために。患者さまやご家族を見守り続けてきたスタッフに、ターミナルケアへの思いなどを聞きました。

病院でも自宅でも望まれるケアを提供

2009年10月に始動した手稲家庭医療クリニックは、家庭医による地域に根ざした医療を行うと同時に、もう一つの特徴を持っています。それは、予後の限られた患者さまを対象とした「ターミナルケア」と「看取り」を取り入れていること。病棟でもご自宅でも、



希望されるケアを提供し、最期の瞬間を迎えるまで患者さまやご家族を支えています。

2階にあるセカンドケアハウスは、がん治療病院からの転院先として、またご自宅への移行施設として、19床の入院病床を備えています。24時間体制でスタッフが見守り、



温もりのあるケアを提供。ゆったりとした造りの病棟は、まるで自宅のようなくつろぎに満ちています。

1階に併設されている「はまなす訪問看護ステーション」は、同クリニックの開設とともに移転。住み慣れたご自宅や地域での生活を望まれる方が、安心して療養できるよう、看護師による在宅ケアを提供しています。

できる限り患者さまの要望を尊重し、最期の時までその人らしく過ごしていただくために。ターミナルの現場では、より良いケアやサポートの実現をめざし、試行錯誤が続いています。



ここからできる濃密なケア 質の高い医療で選ばれる施設に

手稲家庭医療クリニック 看護科マネージャー 森河 琴美

セカンドケアハウスでは、昨年10月の開設以来、約10カ月間で延べ140名の方にご利用いただきました。そのうち約6割が手稲溪仁会病院からの転院で、4割が外来や在宅ケアからの移行などとなっています。

この病棟の良さは、家庭的な雰囲気のなかで、自分らしい最期を迎えていただけること。例えば、イベントや趣味を楽しんでいただいたり、ご家族と自宅にいるように過ごしていただいたり。私たちスタッフも、柔軟な体制で対応するようにしています。落ち着いた環境としっかりとしたサポートのある安心感が、ご家族にも喜ばれています。

心がけているのは「その方らしさを引き出すこと」。ご本人やご家族の言葉に耳を傾け、本当に望まれていることを把握するようにしています。

これからは他の医療機関にも積極的に働きかけ、この病棟の良さを認知してもらうことが必要だと考えています。より良い医療を提供することで、選ばれる施設になるのが目標です。



ご利用者さまの思いをくみ取り 満足していただける在宅ケアを

はまなす訪問看護ステーション 所長 山本 佳瑞子

当ステーションは1993年の開設以来、ご自宅で療養生活を送られる方を、日常生活の看護やリハビリのお手伝いなどで支えてきました。在宅ケアに対するノウハウの積み重ねがあることに加え、今回、手稲家庭医療クリニック内に併設されたことで、主治医との関係が近くなり、より対応がスムーズになりました。

ご自宅でターミナル期を過ごされる方やご家族は、さまざまな不安を抱えています。悩んだり、迷われたりしている方々を、なるべく身近でサポートしたいと考えています。何よりも大切なのは、ご利用者さまのご希望。その方の個性がより強く出る在宅ケアの特徴を生かし、その方らしく生活していただけるようお手伝いする努力をしています。

在宅での看取りはご家族の負担が大きく、数の上ではまだ少ないといえます。制度上の課題などありますが、ご自宅での看取りを希望される方へのフォロー体制なども充実させていきたいと考えています。

高年期～ターミナル

音楽で心安らぐひとときを ～ロビーコンサート

[札幌西円山病院]

札幌西円山病院では、2006年12月から、定期的にロビーコンサートを行っています。入院患者さまとご家族に音楽を楽しんでいただき、少しでも入院生活に安らぎや喜びを感じていただく機会になれば、という思いから企画されました。現在は、看護部、リハビリテーション部、サブライサービス課、医療福祉課が協力しながら運営しています。

プログラムは季節や行事などに合わせて企画。ピアノやバイオリンなどのクラシック演奏、声楽や合唱、ハワイアンなど、趣向を凝らした内容になっています。演奏を担当するのは、ボランティアや病院スタッフのほか、患者さまのご家族などにもご出演いただいています。

より多くの方に楽しんでいただけるように工夫した結果、回を重ねるごとに来場される患者さまや付き添いのご家族が増え、楽しみにされる方もいるほどの恒例イベントとなりました。

長期にわたって入院される患者さまにとって、こうしたコンサートは、心に潤いをもたらすだけでなく、ご家族やスタッフとのコミュ



ニケーションの機会にもなっています。入院環境の質の向上にもつながり、笑顔が増えた患者さまもいらっしゃいます。

これからも、院内外の協力を得ながら、バラエティ豊かなコンサートを実施する予定です。

満足していただけるサービスをめざして ～ご利用者さまアンケートの実施

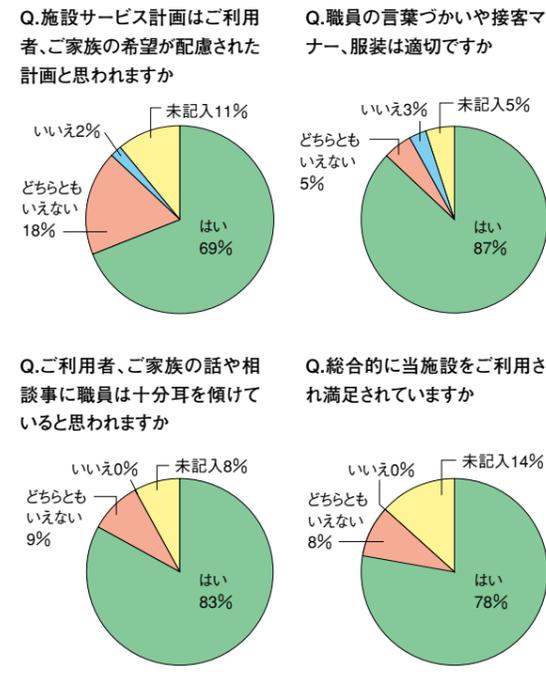
[社会福祉法人溪仁会]

社会福祉法人溪仁会では、ご利用者さまやご家族のご意見・ご要望を把握するため、事業体ごとに「ご利用者満足度アンケート」を実施しています。調査はほぼ毎年行い、集計結果は施設内広報誌や掲示、郵送などによって、ご利用いただいている皆さまに公開しています。また調査結果をもとに、各事業体で分析・検証を行い、サービス体制の改善に役立てています。

2009年7月に西円山敬樹園で実施したアンケートでは、120件のご家族にご協力をお願いし、65の回答をいただきました(回収率54%)。内容は、サービス提供体制、職員の接し方、満足度など5項目、17の質問を実施。職員とのコミュニケーションや対応に対する評価が特に高く、総合的に満足していただいている方が多い、という結果を得ることができました。

近年は、ご利用いただく方々の福祉サービスに対する理解や関心の高まりを背景に、各質問項目に対してもより詳細な評価をいただく傾向が強くなっています。また、自由回答としていただくご意見も増えており、たいへん貴重なものと真摯に受け止めています。当法人では、これからもこうした調査を継続し、皆さまのご意見を施設運営に反映させていきます。

■西円山敬樹園でのご家族アンケートの結果(一部抜粋)



皆さまの入院生活を便利で快適に ～コンビニエンスストアとATMの導入

[札幌西円山病院 他]

溪仁会グループでは、病院内にコンビニエンスストアや銀行のATMなどを導入し、患者さまやご家族の利便性を高めるサービスを強化しています。

札幌西円山病院では、2009年10月より東棟5階に「セイコーマート西円山病院店」がオープンしました。営業時間は8:30～18:00まで。店内は広くはありませんが、飲料や菓子、できたてのお弁当、日用品など、幅広い商品を扱っています。これまで同院



の近くには買い物のできる場所がなく、コンビニエンスストアが院内にできたことで、お見舞いのご家族からは「とても便利になった」と好評をいただいています。また、同年1月には中央棟4階正面玄関ロビーに北洋銀行のATMが開設され、こちらも多くの方にご利用いただいています。

長い入院生活では、患者さ



まご本人だけでなくご家族にも、さまざまな負担やストレスがかかります。こうした設備の充実によって、少しでも入院生活が快適になり、多くの方に喜んでいただけるよう、これからも施設運営を随時見直し、新しいサービスを提供していく考えです。

健康づくりへのアドバイス ～ふれあい健康相談

[札幌西円山病院]

札幌西円山病院では、毎年5月12日の「看護の日」に合わせて、「ふれあい健康相談」を実施しています。これは、今は健康な人にも自分の身体の状態に関心を持ってもらい、病気の予防や健康増進の大切さを認識してもらおう、というイベント。誰でも気軽に受けられることもあり、毎年、患者さまのご家族など、多くの方にご参加いただいています。



2010年は5月10日から14日までの5日間にわたって実施しました。正面玄関受付ロビーを会場に、血圧、血管年齢測定、体成分分析(体重・体脂肪・筋肉量・体水分)を測定。必要がある方には、看護師が数値改善のためのアドバイスなどを行いました。

また、今回は院内のデイルームに特設のリラクゼーションコーナーを設置。心安らぐ音楽と、アロマの香りに包まれるなか、看護師やボランティアの方がヘッドスパやリフレクソロジー、スウェーデン発祥の緩和ケアである「タクティールケア」を提供し、体験した方々に喜ばれていました。

溪仁会グループでは、さまざまなイベントや公開講座、広報活動などを通して、健康意識を高める活動にも取り組んでいます。

特集「誕生～青年期」

特集「壮年期～中年期」

特集「高年期～ターミナル」

ステークホルダーダイアログ

各施設の取り組み

グループ全体の取り組み

トップメッセージ

特集「誕生～青年期」

特集「壮年期～中年期」

特集「高年期～ターミナル」

ステークホルダーダイアログ

各施設の取り組み

グループ全体の取り組み

トップメッセージ

高年期～ターミナル

楽しく質の高いレクを届ける ～レクリエーション講習会

[コミュニティホーム岩内]

レクリエーションは高齢者や障がいを持つ人に、楽しみながら身体・脳の機能を維持・向上させる機会となります。コミュニティホーム岩内に設置されている岩内町地域包括支援センターでは、地域で行う高齢者向けレクの質を高めるため、岩内町と周辺町村で働くケアワーカーを対象とした「レクリエーション講習会」を2009年7月から実施しています。講師はレクの普及・振興団体の代表も務める、西円山敬樹園内「札幌市中央区介護予防センター」の南部広司主任が務めています。第2回目の講習会の翌日には岩内町特別養護老人ホームにて、参加者の前で南部主任が実際に入所者さまと一緒にレクを行うなど、実践を交え、楽しく役に立つレクの知識を伝えています。



ご家族との信頼を深める ～家族懇談会

[西円山敬樹園]



ご利用者さまに心地よく過ごしていただくためには、施設がご家族と協力体制を築くことが大切です。西円山敬樹園ではご家族と話し合う機会を積極的に設けるため、2007年から家族懇談会を実施しています。

2010年は9月11日に開催し、18組27名のご家族が出席されました。当園からはケアの体制変更や行事の報告を行い、「面会時に困っていることや感じていること」のテーマでの意見交換会などにより、ご家族からもさまざまなご意見やご質問をいただきました。意見とともに寄せられたご家族の期待や思いを受け止め、サービスの向上に努めています。

地域に密着した福祉サービスを ～地域福祉への貢献

[社会福祉法人溪仁会]

高齢化の進行とともに、北海道の各地で医療や福祉に関わる施設が不足し、サービスを必要とする人に行き届かないという問題が生まれています。満足のいくケアを受けられ、地域における高齢者福祉の拠点としての役割を担う施設を求める地方の声の高まりを受け、社会福祉法人溪仁会ではその運営に取り組んでいます。

まずは1998年に介護老人保健施設「コミュニティホーム八雲」を開設しました。さらに2000年に「コミュニティホーム美唄」、2007年に「コミュニティホーム岩内」を開設し、それぞれの施設で、入所機能だけでなくデイケアやショートステイなどご利用者さまの

ニーズに合わせたサービスを展開しています。また、地域の保健・医療・福祉サービスの各機関と連携して在宅生活の支援も行うなど、高齢になっても自分らしく生きられる地域づくりへ貢献を続けています。



自宅での自立した生活を支える ～株式会社ソーシャルの訪問介護

[株式会社ソーシャル]

介護が必要になっても、多くの方が住み慣れた家での生活を強く望まれています。株式会社ソーシャルは、地域のケアマネジャーが作成したケアプランに沿って、ヘルパーがご利用者さまの自宅に訪問し、訪問介護・予防サービスを提供する「訪問介護事業」を行っています。

要介護の認定を受けた方には「訪問介護」として、食事・入浴・排せつなどの身体介護を行います。また、家事をする同居家族がいない、または何らかの事情で家事をできないときに、炊事や掃除、生活用品の買い出しなど、生活援助を提供しています。

介護が必要となる前の要支援の認定を受けた方には「介護予防訪問介護」を提供しています。こちらは、ご利用者さま自身が行うのが困難になった家事をお手伝いし、家事への意欲を取



り戻し、自立した日常生活を送れるようになるまで支援します。

ご利用者さまにとってより身近で頼りやすい存在をめざし、2009年6月には事業所を札幌市内3カ所に分けて配置しました。各事業所に介護福祉士およびホームヘルパー2級以上の資格を持ったヘルパーが登録されていて、迅速できめ細やかなサービスを提供しています。



ご利用者さまのスタイルに合わせたサービスを



ソーシャルヘルパーサービス中央
所長 和田和子

ヘルパーの仕事に求められることは、何よりもご利用者さまにできるだけ“合わせる”ということです。ご利用者さまは、体さえ自由に動けば、介護を受けず、家事も自分でやりたいと思われています。特に家事のしかたは一人ひとりのご利用者さまごとにまったく違います。どんなに効率的な方法に思えても、それがご利用者さまのやり方と違えば、ご利用者さまにとってはストレスでしかありません。まずはご利用者さまのやり方に合わせるが一番です。コミュニケーション以上に、「このヘルパーになら任せて大丈夫」と思っていたら仕事をしっかりすることが、何より大切な信頼関係を築くと思っています。

介護難民を生まないために ～介護老人福祉施設の開設に向けて

[社会福祉法人溪仁会]

介護が必要な状態で病院を退院し、その後老人福祉施設などの受け入れ先がなく、介護難民となるケースが問題になっています。さらに療養病床は2012年の全廃に向けて削減が進み、なお行き場のない要介護の高齢者が増えています。

溪仁会グループでは、患者さまに医療から福祉までシームレスなケアを受けていただくことをめざしています。そこで社会福祉法人溪仁会では、地域からの高まる要望を受け、新たに介護老人福祉施設「月寒あさがおの郷」を開設します。特別養護老人ホームに加えて、ショートステイや通所介護事業も合わせて行っていく予定です。2011年7月完成、8月開設となります。



医療・福祉を学ぶ若者たちに聞く 「私たちが考える理想の医療・福祉とは、 そして未来への展望とは」

溪仁会グループでは、地域の皆さまから幅広くご意見やご提言をいただく機会として、「ステークホルダー・ダイアログ」を開催してきました。今回は、医療や福祉について学ぶ学生の方々にお集まりいただき、当グループのサービスや、理想とする医療・福祉のあり方などについて意見を交わしていただきました。ここでは事前に実施した「札幌西円山病院」見学の模様とともに、学生の皆さんから出されたご意見やご感想の一部を抜粋してご紹介します。



八木田 瑞生さん
札幌医学技術福祉専門学校
介護福祉士科1年
介護職不足という実情を知り、「自分が役に立てるなら」と介護福祉士を志す。「お年寄りとコミュニケーションするのが好き」という性格を仕事にも生かしたいと考えている。



木村 友香さん
札幌医学技術福祉専門学校
介護福祉士科1年
祖父が在宅で酸素治療を受けることになり、介護ヘルパーなどの仕事を間近で見たことから介護職に興味を持つ。高校でも福祉について学び、特に高齢者福祉に対する関心が高い。



高田 千里さん
札幌リハビリテーション専門学校
理学療法士科3年
ケガをしてリハビリに通った経験から、リハビリテーションの仕事を知り、入院した祖父の「リハビリの仕事をして欲しい」という言葉に後押しされ、理学療法士を志すことに。

神野 美希さん
北海道医療大学
看護福祉学部看護学科3年
病院で患者さまに一番近い存在の看護師に憧れ、看護の道を志すように。「患者さまのQOLを高め、より良い医療環境を築きたい」という思いから、大学に進学し、看護学を学ぶ。

早川 絵里奈さん
北海道医療大学
看護福祉学部看護学科3年
家族の病気をきっかけに、「患者さまの日常生活から支えることができる、やりがいのある仕事」と看護職に関心を持つ。将来は、対象者一人ひとりの生活まで見届けたケアの実現が目標。

木村 聡美さん
札幌リハビリテーション専門学校
作業療法士科3年
「将来は医療関連の仕事」と思い専門学校に進学。学校での勉強を通じて、作業療法というリハビリの役割や重要性に気づく。患者さまに信頼される作業療法士をめざし猛勉強中。



意見交換会の前に「札幌西円山病院」の院内見学を実施しました。参加された学生さん6名と当日の案内役を務めたMSWの高橋史織さんの記念撮影シーン。

参加者からのご意見・ご提言 (一部抜粋)

札幌西円山病院を見学した感想

【病院の造りや雰囲気などについて】

- 病院全体が明るい雰囲気であることに驚きました。照明やインテリアも工夫されていましたし、屋上があることも印象的でした。長い入院をされる患者さまにとって生活の場となる院内環境への気づきを感じられました(早川さん)
- 入院されている患者さまにとって心地よい雰囲気づくりが大切なのだな、と思いました。病院全体が明るいことで、職員の方の対応や患者さまの表情も明るくなっているのではないのでしょうか(八木田さん)
- その月のイベントの飾り付けがされていて、入院患者さまも季節を意識できるようにされているのだな、と思いました。そうした面からアプローチすることも、患者さまには必要なのだと感じました(木村友香さん)



- 患者さまがくつろげるデイルームや売店などがあり、病院というより“生活の場”という感じでした。また、職員の皆さんが、患者さまだけでなくご家族への気づきをされていたのも心に残りました(高田さん)
- リハビリ室の窓枠に木目が使われているなど、温かな印象の造りになっていて、高齢の患者さまへの気づきを感じました。また、トイレの入り口が広く、これがリアルに使いやすい広さなのだ、と思いました(木村聡美さん)

【病院のサービスなどについて】

- 職員の皆さんがイキイキと働いていて、笑顔が多く見られたのが印象に残りました。案内して下さったメディカルソーシャルワーカー(MSW)の方も、患者さまやご家族と言葉を交わされていて、患者さまと職員との距離の近さを感じました(神野さん)
- 音楽療法に興味があり、大学の授業でも選択しています。この病院でもリハビリにそうした活動を取り入れていると聞き、患者

「札幌西円山病院」見学レポート



札幌西円山病院の医療福祉課でMSWを務める高橋史織さんに案内され、病院施設の見学へ。まず初めに介護病棟の居室の特徴や患者さまがくつろぐデイルーム、ナースセンターなどの説明を受けました。



西棟に設けられた屋上へ。冬期間以外は、患者さまが気分転換をされたり、リハビリの合間に歩かれたりする場として活用されています。「すぐ眺めがいいですね」と、みんな景色の良さに感心していました。



東棟の各リハビリ室を見学。回復期リハビリテーション病棟では、日曜日でも休まず365日リハビリテーションを提供しています。自分たちと年齢の近いリハビリスタッフと患者さまとのやり取りを、興味深い様子で見せていました。

施設見学の後に、参加者による意見交換会を実施しました。その際に出されたご意見などをテーマごとにご紹介します。

さまの精神に働きかけるセラピーの重要性を改めて認識しました(早川さん)

●介護病棟、リハビリ病棟、神経難病の方が対象の病棟などを見学させていただいたことで、病棟ごとの機能や対象患者さまの違いがはっきりとわかり、この病院の役割を理解できました(高田さん)

現在の医療や福祉が抱える問題点

●保健師の実習で、サービスを必要とする人はたくさんいるのに、それを補える施設が少ない、と実感しました。都市圏である札幌でもこの状態なら、地方部はもっと大変なのではないか、と悲しく思いました(神野さん)

●同様に保健師の実習でデイサービスを希望されている方を担当しました。その方は、街の中心から離れた場所に住んでいて、送迎が難しいという理由で利用を断られてしまうことが多く、希望する施設やサービスを選べないと感じました。住む場所によって、受けられる医療や福祉のサービスに格差があるという現実を目の当たりにしました(早川さん)

●患者さまや利用者さまのプライバシーは、果たして守られているのだろうかと感じることがあります。例えば、トイレの入り口がカーテンになっていたりしますが、対象者さまは望まれていないかもしれません。介助側の都合で尊厳を損なうようなことがあってはならないと思います(八木田さん)

●利用者さまが本音を言える関係性を築けるのか。忙しい日常業務のなかで、利用者さま本位のサービスをどれだけできるのか。理想とするサービスを本当に実現できるのだろうかという不安感もあります(木村友香さん)

●脊髄損傷で下半身が全マヒという患者さまに接する機会がありました。ご本人は「良くなる可能性がないのに、もうしばらくしたら退院しなければならぬ。家に戻っても自分で生活はできないのに」と心配されていました。今の医療制度では、患者さまを受け入れる日数などに制限があることを実感し、ショックを受けました(高田さん)

●まだ自立歩行ができない患者さまでも、時期が来たら退院して、あとは週に1度の通所リハビリで、決められてしまうことがあります。日常生活でさえ困難があるはずなのに、リハビリに通うための負担の大きさはどれほどなのだろう、と医療の限界について考えさせられます(木村聡美さん)

特集「誕生〜青年期」

特集「壮年期〜中年期」

特集「高年期〜ターミナル」

ステークホルダー・ダイアログ

各施設の取り組み

グループ全体の取り組み

トップメッセージ

特集「誕生〜青年期」

特集「壮年期〜中年期」

特集「高年期〜ターミナル」

ステークホルダー・ダイアログ

各施設の取り組み

グループ全体の取り組み

トップメッセージ

理想とする医療や福祉のあり方 自分が目標とする将来像

●大切なのは、患者さま自身をよく知ったうえで、ケアを考えること。患者さまの目線になって接するようにすることが目標です。理想は家庭の延長にあるケア。病気を患っている人としてではなく、地域で暮らす人としてとらえ、支えていきたいと思えます（神野さん）



●制度や病院の都合を押しつけるのではなく、地域での生活まで考えた、その人に合ったケアを提供するのが理想です。看護師のケアでも一つの答えではなく、原因や痛みによってさまざまなアプローチがあるはず。実情は、忙しいという理由で一人ひとりに即したケアができていない場合もありますが、それは患者さまへの言い訳にはならないと思えます（早川さん）

●例えば、病院でも施設でも同じだと思いますが、利用者さまは毎日お風呂に入れなくて多く、それだけに、数日に一度の入浴がリフレッシュの機会になっています。心から入浴を楽しんでいただくためにも、細かな要望まで正直に言っていたらいいような信頼関係を築きたいと思っています（八木田さん）

●院内見学の際、リハビリ室で患者さまとリハビリスタッフの方が、目線を合わせてじっくり話をされている様子を見ました。私も将来は、利用者さまの思いをしっかり受け止め、笑顔になってもらえるような介護福祉士になりたいと思えました（木村友香さん）

●リハビリ室にいますと、患者さまの日常や居室での様子を見る機会が少なくなります。リハビリ室でできていたことが、居室に戻るとできなくなってしまうケースもあるため、患者さまに最も近い看護師の方々と情報を共有しながら、連携していくことが大切だと思います（高田さん）

●高齢の方は、少しずつできることが少なくなっています。失われた機能の回復だけでなく、精神面のサポートも重視しながら、これから必要とされる予防や機能維持にも取り組んでいきたいと思えます（木村聡美さん）

●施設や病院を簡単に増やすことが難しいのは理解できます。でも、多くの待機者がいる現実を見れば、もっと増やしてもいいのではないかと、思います。介護職不足と言われていますが、施設が増えて仕事のやりがいを伝えることで、介護の道に進もうという若い人が増えてくるはずだと信じています（八木田さん）

ステークホルダー・ミーティングに 参加した感想

●学校では、職種の連携の大切さを教わっていましたが、実際にこうした場に参加して、ほかの人たちの意見を聞くことで、多くの学びや気づきがありました（神野さん）

●リハビリ室の造りなどで、職種による視点の違いを実感しました。自分だけでは偏りやわからないことがあっても、他職種とかかわることで、多様な考え方ができると思いました（早川さん）

●授業で“他職種との連携が重要”と言われていても、そうした機会を持つことができませんでした。今回参加させていただいたことで、それぞれの役割や考え方の違いを実感することができ、貴重な経験になりました（木村友香さん）

●看護師の方は、患者さまの日常を見ている分、考え方も現実味があるなと感じました。今回のミーティングに参加したことで、一人の患者さまのためにいろいろな職種が協力し、目標を達成するというイメージをつかむことができ、とても良かったと思えます（木村聡美さん）

ステークホルダー・ミーティングを開催して (溪仁会グループ本部より)

今回は、医療や福祉について学ぶ、若い学生さんたちにご参加いただき、新しい視点でのステークホルダー・ミーティングを開催しました。「若い人たちが、溪仁会グループのサービスをどのように感じるのだろう。理想とする医療・福祉とはどのような姿なのだろう」ということを知りたい、というのが理由でした。

参加されたどの学生さんも医療・福祉の現状をしっかり見と見すえ、高い問題意識と将来の仕事への情熱を持たれていることに驚かされました。そうした学生さんからのご意見は、「はっ」と気づかされることが多く、とても新鮮なものでした。

これからも溪仁会グループでは、さまざまなステークホルダーの皆さまからご意見を聞く機会や対話の場を設けていく予定です。皆さまからいただいた貴重なご意見は、当グループの事業運営に反映させていきたいと考えています。

「札幌西円山病院」見学レポート



病棟内では、居室の造りの違いや浴室、テイルームなどを見学。同じ病棟内でも、患者さまの症状ごとに機能や役割の違う病棟があることを初めて知った人も多かった。



学校で勉強をしている、言葉の意味や仕事の意義は実際の現場を見ないと実感できないこともあります。今後の役に立つ貴重な機会のため、誰もが高橋さんの話に興味をもち、真剣に耳を傾け、こまめにメモを取っていました。



一般病棟などを見学した後、中央棟の正面玄関に到着。札幌西円山病院は横に広い造りのため、建物の配置図を見ながら、「ここを見学したんだね」と改めて確認していました。



地域とともに、保健・医療・福祉を見つめて

溪仁会グループ 各施設の取り組み

溪仁会グループでは、地域の皆さまに安心と満足を提供することを使命と考え、質の高い保健・医療・福祉のトータルサポートの提供にグループ全体で努めています。皆さまに信頼され愛される病院・施設づくりを推進し、ニーズにお応えするサービス体制を築くために。マネジメントの徹底を図り、より安定的にご利用いただける組織運営を進めるために。そして、これからも「頼りにされる保健・医療・福祉」を守り続けるために。ここでは当グループの各施設・法人の“今”をご報告します。

- 医療法人溪仁会 手稲溪仁会病院
- 医療法人溪仁会 手稲家庭医療クリニック
- 医療法人溪仁会 札幌西円山病院
- 医療法人溪仁会 定山溪病院
- 医療法人溪仁会 溪仁会円山クリニック
- 社会福祉法人溪仁会

手稲溪仁会病院

札幌市手稲区前田1条12丁目1-40 ☎011-681-8111

地域医療の『最後の砦』として 皆さまに信頼される存在であるために

当院を中心とする手稲溪仁会医療センターでは、昨年10月の手稲家庭医療クリニックに続き、今年7月には産科病棟においてNICU（新生児特定集中治療室）が始動するなど、医療体制の整備・充実に取り組んでおります。特にNICUはわずか3床からのスタートですが、これをきっかけに、将来的には小児救急やPICU（小児集中治療室）などにも発展させていければ、と考えております。

また、当院ではかねてより、最先端のがん治療にも重点を置き、組織を強化してきました。昨年、「地域がん診療連携拠点病院」に指定されたことで、地域における当院の役割が明確になり、積極的な情報提供など、院内外に向けた活動も展開しております。

こうした取り組みには、他の医療機関との密接な連携体制が不可欠です。当院では地域医療連携をさらに推進し、多くの医療機関と手を取り合いながら、患者さまにとってより良い医療の提供に努めていく考えです。

「常に上をめざしながら、地域の皆さまのため



手稲溪仁会病院院長
田中 繁道

に良質な医療を提供する」。それが私どもの使命であり、医療に従事する者の責務でもあります。今年4月からは『T（TEINEのT）プロジェクト』を立ち上げ、各セクションごとに施設や院内環境などの整備に関して検討を始めました。こうした取り組みを通して地域医療を担う中核病院としての機能を果たし、住民の皆さまや医療機関にとっての「最後の砦」となるべく、これからも努力と挑戦を続けてまいります。



■稼働病床数…550床
内 救命救急センター 19床
ICU 12床
SCU 6床
NICU 3床
開放型病床 5床

■診療科目
内科・呼吸器内科・循環器内科・消化器内科・血液内科・腫瘍内科・腎臓内科・外科・呼吸器外科・消化器外科・心臓血管外科・整形外科・脳神経外科・形成外科・精神保健科・リウマチ科・小児科・皮膚科・泌尿器科・耳鼻咽喉科・頭頸部外科・産科・婦人科・眼科・麻酔科・病理診断科・放射線診断科・放射線治療科・救急科・歯科・小児歯科・口腔外科

■主な特徴
救命救急センター・厚生労働省救急医療対策事業・ドクターヘリ導入促進事業実施主体（基地病院）・臨床研修指定病院・ISO9001/14001認証（審査登録）・日本医療機能評価機構認定病院（一般病院）・プライバシーマーク認定・DPC対象病院 など

■診療実績
年間外来患者数 351,653名
年間入院患者数 187,707名
年間分娩件数 474件
年間透析患者数 7,848名
年間手術件数 7,419件
年間消化器内視鏡検査数 19,003件

情報公開による医療連携の強化

～地域がん診療連携拠点病院としての取り組み報告会

当院はかねてから地域医療連携を推進してきました。2009年4月に「地域がん診療連携拠点病院」の指定を受けたことにより、がん診療においても医療連携体制を強化。提携医療機関も着実に増えています。

当院のがん診療に対する取り組みについて、もっと広く知っていただき、より信頼していただくため、2010年8月、「地域がん診療連携拠点病院としての取り組み状況のご報告会」を開催。約30の医療機関から多数の医師やスタッフの方にご参加いただきました。



地域の方々の温かな心に支えられて

～長期ボランティアスタッフの表彰

当院では院内ボランティアグループ「青い鳥」のメンバー約70名が、外来案内や患者さまの話し相手、デイサービスの手伝い、イベント開催などを行っています。1998年の発足以来、ボランティアメンバーの温かな気づかいや笑顔にほっとされる患者さまも多く、病院のスムーズな運営には欠かすことのできない存在となっています。

そうしたボランティアメンバーの中から、長期にわたって活動を続けてこられた方に敬意を表し、毎年表彰を行っています。2009年度は活動歴1,000時間が2名、2,000時間が4名、6,000時間が1名の計7名を表彰。田中繁道院長より表彰状と記念品が手渡されました。

「青い鳥」の活動は、できたばかりの手稲家庭医療クリニックにも広がっています。病院を訪れる方が、安心して快適にご利用

この会では「前立腺がんPSA検診地域連携バスのご紹介と実績報告」と、「5大がんの診療実績報告」が行われ、各担当医師が主な取り組み事例を説明。最新のがん診療について、資料や動画などを用いて報告を行いました。

スムーズな医療連携で 患者さまが安心できる環境を



医療法人社団ビエタ会
石狩病院
理事長・院長 森川 満氏

このような報告会を開いていただくと、患者さまをご紹介する側の病院にとって信頼の裏付けになります。治療技術などを知る機会にもなり、安心して患者さまをご紹介することができます。がん診療に限らず、こうした取り組みは、医療連携を進める上で重要だと感じました。

地域の医療機関は、医師不足など多くの課題を抱えています。将来的には、患者さまを動かすのではなく、スタッフが自由に病院間を行き来できるような医療連携のシステムができれば、というのが理想です。これからの手稲溪仁会病院の取り組みにも期待しています。

できるように、という願いは、ボランティアのメンバーも職員も同じです。地域の皆さまのご協力をいただきながら、これからもより良い医療サービスの提供や環境整備に努めていきます。



医療法人 溪仁会 手稲溪仁会病院 DATA



手稲家庭医療クリニック

札幌市手稲区前田2条10丁目1-10 ☎011-685-3920

地域に根ざした家庭医療の取り組み 「ともに考える」ことから信頼が生まれる

当クリニックは昨年10月、幅広い疾患に対応する外来診療を柱に、在宅ケアを行う訪問看護ステーションと終末期の患者さまを対象とした入院病棟（セカンドケアハウス）を兼ね備えた施設として始動いたしました。

“家庭医療”とあるように、その地域に深く根ざした医療やケアを提供し、年代や性別、症状にかかわらず、あらゆる初期診療に対応するのが当クリニックの特徴です。同時に、日本ではまだ数が少ない家庭医の養成も目標としており、若い研修医たちが、トレーニングを積み重ねる場にもなっております。

開設してまだ1年ですが、少しずつ地域の皆さまにも当クリニックをお知りいただき、活動の意義が理解されるようになってきました。手稲区だけでなく、隣接する石狩市や後志・留萌地方からの患者さまも増えており、地域との連携体制も強化されてきております。

手稲家庭医療クリニック院長
小嶋 一

当クリニックでは、地域に軸足を置いた活動を続けながら、より信頼されるための医療サービスの向上とスタッフのスキルアップをめざしています。また、手稲溪仁会医療センターの一施設であるメリットを生かし、本院の各科とも連携しながら、蓄積された情報の分析や検証も行っていきます。

患者さまやご家族の不安を少しでも軽くするために、「一緒に考えていくこと」。それが、私たちが最も大切にしているポリシーです。常に皆さまに寄り添いながら、信頼され、愛される医療の提供をめざしてまいります。



患者さまにとってより良い医療環境を追求

～家庭医療カンファレンス

当クリニックは、これからの医療を担う家庭医の育成にも取り組んでいます。研修医たちは、臨床においてさまざまな症状の患者さまを診察することで、日々、医師としての研鑽を積んでいます。

そうした若い医師を育てる目的と、医療サービスの質向上をめざして毎週火曜日の午後に行っているのが、家庭医療カンファレンスです。医療におけるカンファレンスとは、症例検討会のこと。毎回テーマを決め、家庭医療のトピックスについてさまざまな角度から検討します。

参加するのは、医師を中心に、看護師や併設の「はまなす訪問看護ステーション」のリハビリスタッフなど、テーマによって変わります。組織横断的に話し合うことで、多様な意見や視点を取り入れることができ、スタッフ間の意思疎通にも役立ちます。また、研修医たちもそこで学んだことを臨床現場に活かし、患者さまへの対応力を向上させています。

これ以外にも、月に1回業務改善カンファレンスを実施して



ます。これには事務スタッフも参加し、例えば患者さまの待ち時間短縮といった、サービス改善に取り組んでいます。

毎週火曜日の午後が休診なのは、より良い医療をめざしてスタッフ同士が切磋琢磨しているからです。地域の皆さまから信頼されるクリニックをめざし、これからも医療サービスの向上に努めていきます。

四季折々の楽しみで笑顔のあるケアを

～イベント&お茶会

当クリニック2階のセカンドケアハウスは、主にターミナル期のがん患者さまが入院されています。患者さまやご家族にホッと安らぎを感じていただいたり、思い切り笑ってリフレッシュしていただく機会を、というスタッフの思いから実施しているのが季節ごとのイベントや、月1回のお茶会です。

スタッフやボランティアの方が中心になって企画し、毎回、趣向を凝らしたイベントを開催。お祭りの屋台を楽しんだり、みんな



で童謡を歌ったり。ときには入院患者さまが歌や朗読を披露されることもあり、当クリニックの名物イベントになっています。また、以前入院されていた患者さまのご家族にも開催のご案内を差し上げるなど、より多くの方々にご参加いただけるように工夫しています。患者さまも笑顔で



見せられることが多く、ご家族にも喜ばれています。

入院生活が長くなると、患者さまはもちろんですが、ご家族にも心身ともに負担がかかります。こうしたイベントが「レスパイト＝息抜き」の機会にもなり、少しでも皆さまの心に残るよう、これからも要望をお聞きしながら、定期的に開催していく予定です。

医療法人 溪仁会 手稲家庭医療クリニック DATA

- 診療科目
内科・小児科・産婦人科
- 主な特徴
在宅療養支援診療所・はまなす訪問看護ステーション併設・日本家庭医療学会認定
後期研修プログラム実施 など
- 病床数…19床

- 沿革
2009年10月 手稲家庭医療クリニック開院

■運営実績（2009年10月～2010年3月）	
外来延患者数	4,516名
在宅（一般）延患者数	151名
在宅（グループホーム）延患者数	276名
入院延患者数	1,312名



札幌西円山病院

札幌市中央区円山西町4丁目7-25 ☎011-642-4121

すべては医療の質の向上のために 次代を見すえながら、社会的責任に取り組む

当院は昨年11月、開院30周年を迎えたことを機に名称変更を行いました。誠実に積み上げた「リハビリテーション」と「ケア」への取り組みを引き継ぎながら、さらに新たな歴史を築く意気込みを示したことで、病院全体の意識改革という効果にもつながっております。

今年は、当溪仁会グループが2006年から掲げてきたCSR経営の節目の年であり、新たな中長期計画を視野に、当院の次の展望づくりに着手する時期でもあります。医療制度が激変するなかで、どれだけ医療の質を守り、ステークホルダーの皆さまのために貢献できるか。その難題に立ち向かうため、院内プロジェクトチームを立ち上げ、ハード・ソフト両面の検討をスタートしました。

患者さまに信頼され、選ばれる医療を提供するには、より多くの職員の力が必要です。たくさ

んの職員が技量を高めあうことで医療サービス全体の質を向上させ、やがてその中から全国で活躍するような人材が巣立つ——。そうした、日本の医療に貢献する人材育成も当院の一つの使命であると考えております。

当院は患者さま本位のサービスに取り組み、多くのエビデンス（治療の根拠）を構築してきました。また、関東以北最大の病床を持つ慢性期病院として、多様なデータの蓄積もあります。社会に向けた情報発信や提唱によって、日本の医療制度を動かす波を生み出すこと。そうした活動も当院の社会的な責任としてとらえ、積極的に取り組んでいく考えです。

札幌西円山病院院長
峯廻 攻守



■稼働病床数…866床

- 内 介護療養型医療施設 310床
- 療養病床入院基本料 298床
- 障害者施設等13対1入院基本料 169床
- 回復期リハビリテーション病棟1 89床

■診療科目

- 内科・神経内科・リハビリテーション科・循環器内科・歯科

■主な特徴

- ISO9001/14001認証（審査登録）・日本医療機能評価機構認定病院・プライバシーマーク認定・通所リハビリテーション/訪問リハビリテーション併設 など



あらゆるステージにおいて継続的なケアを ～チームアプローチによるリハビリテーション～

高齢者医療を担う当院では、リハビリテーションによるケアに力を入れてきました。入院患者さまの回復期・維持期・緩和期という全ステージにわたるケアに加え、通所や訪問リハビリも展開し、患者さまの生活の質を維持・向上させるための取り組みを行っています。

そうした活動を中心になって支えているのが、リハビリテーション部です。現在は約150名ものリハビリスタッフが所属し、チームとして連携しながら効果的なリハビリを提供しています。

現在、当院の療養病床に入院する患者さまの90%以上が、何らかのリハビリを受けています。回復期については専門医を中心に、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士によるチームアプローチを実施。1年間休むことなく、365日体制でリハビリを提供しています。また、維持期は個別リハに加えて、レクリエーションワーカー、健康運動指導士、音楽療法士といったスタッフによるグループリハビリを導入し、患者さまが楽しみながら参加できる環境を整えています。緩和期は、ベッドサイドでのケアを中心に、苦痛



の軽減や呼吸器補助などを行っています。

在宅で療養される方に対しては、通所リハビリと訪問リハビリをそれぞれ充実させています。リハビリメニューを組み立てる際にはスタッフがご自宅を訪問し、必要な動作や生活環境を確認する対応も始めました。

必要な方に、必要なリハビリを提供するために、これからもリハビリの充実をめざしていきます。

国籍を超えてともに働く未来のために ～インドネシア人看護師の研修受け入れ～

2008年より、日本とインドネシア間で結ばれたEPA（経済連携協定）によって、外国人看護師候補者の受け入れが始まりました。当院でも、2010年1月から、キニ・スヘルニさんとリサ・エルフリナ・シレガルさんが、日本の看護師免許取得をめざして働いています。

EPAとは協定を結んだ国の間で、物品などの貿易に加え、人の移動や投資なども自由化し、経済連携の促進をめざすもの。インドネシアからの看護師・介護福祉士候補者の受け入れも、その一環で行われています。

キニさんとリサさんは、半年間の日本語研修を受けた後、当院での研修を始めました。現在は介護職員として働きながら、日本の看護について学んでいます。3年間の滞在期間で日本語をマスターし、国家試験に合格するため、2人とも熱心に勉強を続けています。

受け入れ側の当院でも、外国人への教育ノウハウがなく、医療用語の翻訳や日本語教育など、一つ一つ手探りで進めています。現在は、院内のスタッフが先生になって日本語を教えたり、パ

ソコンによる通信学習などを導入しています。また、ボランティア（医師・看護師）の方からの専門領域の学習も開始し、受験に向けてみんなでサポートをしています。

明るい笑顔がトレードマークの2人。日本語の会話能力も上達して、患者さまとのコミュニケーションにも役立っています。看護師国家試験の合格に向けて、2人と当院の勉強の日々が続きます。



医療法人 溪仁会 札幌西円山病院 DATA

■沿革

- | | |
|-------------------------------|-----------------------|
| 1979年 6月 西円山病院開院 | 2004年 1月 ISO14001審査登録 |
| 1990年 7月 医療福祉サービスセンター開設 | 2007年 3月 日本医療機能評価機構認定 |
| 12月 患者家族の会設立 | 10月 院内保育所 |
| 2000年 6月 NSTチーム | 「西円山ピッコロ保育園」新築 |
| (Nutrition support team) 立ち上げ | 2009年11月 札幌西円山病院に改称 |
| 2001年 1月 ISO9001審査登録 | |



特集「誕生〜青年期」

特集「壮年期〜中年期」

特集「高年期〜ターミナル」

ステークホルダーダイアログ

各施設の取り組み

グループ全体の取り組み

トップメッセージ

定山溪病院

札幌市南区定山溪温泉西3丁目71 ☎011-598-3323

良質な慢性期医療のモデルとして 未来へと続く医療の姿を描く

当院は、長期の入院や療養が必要な患者さまに対する質の高い医療の提供に取り組んできました。2010年5月には、慢性期医療の質のガイドラインとして始まった「慢性期医療認定病院」の第1号となり、改めて当院の医療の質の高さが認められました。この審査の受審によって当院の特性が明確になると同時に、全国で初の認定を受けたことで、職員全体の志気向上にもつながっています。

当院ではこれまでも、多くの先駆的な活動を行ってきました。終末期に対する取り組みもその一つです。医療の提供側と患者さまご家族が同じ思いを共有し、より満足していただける環境をつくるため、ご希望される方と「終末期の医療についての意思確認書」を交わしています。また、抑制廃止やすべての入院患者さまに対するリハビリテーションの実施など、常に患者さまの目線で考えながら、慢性期医療の新しい可能性を切り開いてきました。

こうした、常に挑戦し続ける組織風土を支えているのは職員の努力です。みんなが誇りと自信を持って仕事に臨めるよう、働きやすい環境を整えていくことも責務だと考えています。



定山溪病院院長
中川 翼

社会の情勢や制度によって、慢性期医療も変化していく必要があります。介護施設などの増加もあり、ますます病院としての存在意義が問われる時代が来るでしょう。日本における慢性期医療のロールモデルとして、さらなる医療の質の向上に努め、新しい価値を創造する役割を果たしていきたいと考えています。



慢性期医療の質の向上をめざして ～「慢性期医療認定病院」第1号認定



当院は、抑制廃止宣言や終末期医療への取り組み、すべての患者さまへのリハビリテーションの実施など、良質な慢性期医療の提供をめざして活動を続けてきました。長期間の療養を必要とする患者さまに対して、人権を尊重した思いやりのある医療環境を整え、社会的に高い評価を受けています。

近年は、慢性期医療が果たす社会的な役割が大きくなっていくことから、明確なガイドラインを設け、さらなる質の向上を図る必要性が高まってきました。こうした動きを受け、一般社団法人日本慢性期医療協会では、2010年度から「慢性期医療認定病院」の認定審査を開始しました。審査は、①医療、②薬剤、③看護・介護、④リハビリテーション、⑤検査、⑥栄養、⑦医療安全・院内感染防止対策、⑧終末期医療、⑨チーム医療、⑩地域連携の10領域にわたる臨床指標に基づいて行われ、慢性期医療の質を適正に評価する内容になっています。

当院は2010年5月25日に受審し、第1号の認定病院となりました。これまでも、1998年に財団法人日本医療機能評価機構の長期療養病院第1号の認定を受けるなど、全国に先駆けた取り組みを行っていましたが、慢性期医療に特化した審査の認定を受けたことで、さらに医療サービスに対する質が裏付けされたこととなります。これからも、より良い慢性期医療をめざす取り組みに挑戦していきます。

地域に開かれた病院をめざして ～定山溪中学校との交流

当院では、定山溪温泉という地域にある病院として、地域との密接なかわりを大切にしています。なかでも定山溪中学校とは吹奏楽部の演奏をきっかけに、2000年から毎年交流事業を続けてきました。

現在の交流活動は、「病院体験学習」として2日間にわたって行っています。初日は当院の看護職やリハビリスタッフ、歯科衛生士、メディカルソーシャルワーカー（MSW）などが中学校を訪問し、各学年に病院の機能や現在の職業を選択したきっかけ、各職種の役割についての説明を実施。事前学習を行ったうえで、2日目は院内での業務を体験学習してもらいます。内容はボランティア活動体験や病棟での入院患者さまの介助体験、リハビリテーションの訓練体験など、学年ごとにさまざまなメニューを提供。患者さまも、生徒さんとふれあうことで楽しいひとときを過ごされるなど、入院環境に明るさと笑顔をもたらす機会にもなっています。

2009年度は10周年記念講演として、事前学習では遠洞経営管理部長が、体験学習では中川院長が、それぞれ講師として自

身の体験談を交えながら、病院で働くことの意義を説明しました。生徒さんからは、「病院で働くことは大変やりがいのある仕事であり、思いやりを大切にすることを学んだ」といった感想が聞かれました。

これからはさらに地域交流の拡大を図り、南区からやがて札幌市内全域へと広げていく構想もあります。病院や医療職種への理解を深めるための活動を推進し、地域交流の全国モデルとなることをめざしています。



医療法人 溪仁会 定山溪病院 DATA

■稼働病床数…386床
内 医療療養病棟 245床
特殊疾患病棟 141床

■診療科目
内科・神経内科・リハビリテーション科・歯科

■主な特徴
ISO9001/14001認証（審査登録）・プライバシーマーク認定・日本医療機能評価機構認定病院・慢性期医療認定病院・通所リハビリテーション/介護予防センター併設 など



■沿革
1981年 5月 定山溪病院開院
1996年10月 新棟完成
1998年11月 日本医療機能評価機構認定
1999年 7月 抑制廃止宣言
2001年 1月 ISO9001審査登録
2004年 1月 ISO14001審査登録
2006年11月 増築棟竣工
病室の個室化、厨房の新設等
2010年 5月 慢性期医療認定病院



特集「誕生」青年期
特集「壮年期」中年期
特集「高年期」ターミナル
ステークホルダーダイアログ
各施設の取り組み
グループ全体の取り組み
トップメッセージ

溪仁会 円山クリニック

札幌市中央区大通西26丁目3-16 ☎011-611-7766

一人ひとりの状況に合った 予防医療を確立するために

当クリニックの使命は、質が高くわかりやすい健診を提供すること。そして皆さまの健康づくりへの意識を高めることです。生活習慣の改善指導や、健康についての情報発信を進めていくことでもあり、これらを合わせることで予防医療が確立すると考えています。私たちの合言葉は「Activeな予防医療にchallenge」です。

もっと積極的な活動を行うために、今年6月に生活習慣病外来と禁煙外来を設置しました。1回の指導では改善しにくい人にも、長期のプログラムによって、しっかりと生活改善の指導を進めることができるようになりました。この外来には新たに電子カルテを導入し、当クリニック独自のシステムを作りました。来年4月には健診システムも合体させた運営をめざしています。

また、満足度の高い健診を提供するため、人の動きや検査の流れ、マネジメントなど健診のあり方の見直しを行いました。それに伴い診察室の増設、インターネットコーナーの設置といった施設改修も行いました。当院のホームページも大幅に改訂し、さまざまな情報をよりわかりやすくお伝えしています。

溪仁会円山クリニック院長
道家 充

さらに、健診の質を保証するために、人間ドック・健診施設機能評価の認証取得を申請しています。健診後に精密検査が必要な場合は、遠方から検査を受けた方も安心できるよう各地の病院・診療所との連携を深めています。

これからはより一人ひとりに適合した健診の提供が求められるでしょう。予約の段階でその人に必要な検査を選ぶオーダーメイド健診を実現することが理想です。そのためにも、職員全員の専門的知識をレベルアップさせていきたいと思えます。



健康づくりへの貢献

～保健指導や啓発活動による健康増進

病気にかかってからの治療だけでなく、いかに病気を予防するかということが医療の大きな役割となっています。予防のために重要なのは、病気の原因となる食生活や運動など良くない生活習慣を見つけ、その習慣を改善することや、体の異常を早期のうちに発見するため、定期的なチェックを行うことです。

当クリニックでは保健師や管理栄養士による保健・栄養相談をはじめ、さまざまな方法で健康的な生活習慣への改善を促しています。また、企業と提携した健康づくり教室などのアドバイス事業や、遠隔地を含む全道の自治体からの要請に応じ、講演や健康教室なども行っています。

2004年からは、生活習慣の改善方法や健康づくりの話題を掲載した院内広報誌『えん』を発行しています。そのほかにもポスターやパンフレットなどを利用し、健康づくりの大切さを訴えかけてきました。

健康づくりへの関心は年々高まっています。健康を求める人に十分な生活改善の指導を進め、関心の少ない人をより多く取り込めるように、地域への啓発活動を継続していきます。



より満足度の高い健診の提供へ

～施設等のリニューアル

当クリニックは、各種人間ドックや企業健診など、さまざまな健診事業を展開してきました。しかし、開院より20年が経過し、検査に効率性を求められる方々と、時間がかかってもより詳細な検査を受けたいという方々へ、それぞれの要望にそった対応ができていないのではないかという思いから、施設やシステムの見直しを行いました。

まずは検査の手順などを見直し、施設内での動線を作り直して効率化を図りました。さらに、自らの意志で人間ドックを受ける、

健康に対する関心の高い方には、きちんと医師の面談時間を設けられるよう、面談室を増加し、常勤医も4名に増やしました。専門のスペースを確保し、外来診療（P16参照）も開始しています。

また、インターネットコーナーを増設し、待ち時間などにご使用いただけるようにしました。

施設だけでなく、健診の結果などもよりわかりやすくお伝えできるよう結果報告書を見直しました。今後は外来開始の際に導入した電子カルテを健診にも利用し、データの蓄積や引き出しを容易にするなど、ソフト面からもさらなる健診サービスの充実を図って行く予定です。



面談室



インターネットコーナー

■健診事業（施設健診・巡回健診）

健康診断（人間ドック・健康診断・全国健康保険協会管掌生活習慣病予防健診・特定健診）、オプション検査（CT・胃内視鏡・ピロリ菌・乳がん・腫瘍マーカー・内臓脂肪・脳ドックほか）、保健相談・指導、栄養相談・指導、保険診療（生活習慣病予防外来・再検査） など

■主な特徴

ISO9001/14001認証（審査登録）・プライバシーマーク認定 など

■健診受診者数

人間ドック 15,664名
生活習慣病 6,256名
主婦健診 923名
一般健診 4,293名
巡回健診 7,250名
保健指導 145名

■沿革

1990年 1月 円山クリニック開設
2001年 2月 ISO9001審査登録
2002年 4月 溪仁会円山クリニックに名称変更
2004年 1月 ISO14001審査登録
2010年 6月 生活習慣病外来・禁煙外来を設置



医療法人 溪仁会 溪仁会円山クリニック DATA

特集「誕生」～青年期

特集「壮年期」～中年期

特集「高年期」～ターミナル

ステークホルダーダイアログ

各施設の取り組み

グループ全体の取り組み

トップメッセージ

社会福祉法人 溪仁会

地域の高齢者福祉を支え続けるために シームレスなサービスと組織の変革をめざす

社会福祉法人 溪仁会 理事長
谷内 好

2009年に当社会福祉法人は名称変更を行い、名実ともに溪仁会グループの一組織となりました。1年半が経ち、職員の意識の高まりを感じると同時に、溪仁会というブランドに対する社会からの期待の大きさをあらためて認識し、これまで以上にサービスの質を高めていく必要があると真摯に受け止めております。

社会福祉法人は、地域福祉においてさまざまな社会的使命を担っています。そのなかでも、私どもは1982年の設立以来、高齢者の福祉向上に努めてきました。これからも、この基本姿勢は変わらず、医療法人 溪仁会ともシームレスに連携することで、社会や地域の皆さまからの要請に応えていく考えです。

福祉サービスは、多くの職員の努力によって支えられています。やりがいと誇りを持って働ける職場環境づくりも重要なテーマの一つであり、職員が常に成長できる体制の整備にも取り組んでいます。理想は「一生働くことのできる職場」。



福祉に携わる職員の人生も充実したものになるよう、生涯を通じて職場とかかわることのできる仕組みづくりも構想中です。

2011年には、豊平区に介護老人福祉施設「月寒あさがおの郷」を開設する予定です。地域における高齢者福祉の拠点としての役割も果たせるような施設をめざしています。

法人設立30周年を迎えるにあたり、プロジェクト委員会を立ち上げ、体制整備にも着手いたしました。経営基盤を強化し、さらなる福祉サービスの向上にも取り組んでまいります。



主な施設と事業

介護老人福祉施設(特別養護老人ホーム)
西円山敬樹園
札幌市中央区円山西町4丁目3-20
☎011-631-1021

地域密着型介護老人福祉施設
菊水こまちの郷
札幌市白石区
菊水上町4条3丁目94-64
☎011-811-8110

介護老人保健施設
コミュニティホーム白石
札幌市白石区本郷通3丁目南1-35
☎011-864-5321
コミュニティホーム八雲
北海道八雲町栄町13-1
☎0137-65-2000

コミュニティホーム美瑛
美瑛市東5条南7丁目5-1
☎0126-66-2001
コミュニティホーム岩内
岩内郡岩内町字野東69-26
☎0135-62-3800

軽費老人ホーム(ケアハウス)
カムヒル西円山
札幌市中央区円山西町4丁目3-21
☎011-640-5500

新たな組織づくりのターニングポイントに ～創立30周年記念事業 プロジェクト委員会の活動

当社会福祉法人は、来年12月に創立30周年を迎えます。初めての施設「西円山敬樹園」を開設したのが1982年4月であることから、2012年4月を30周年のターニングポイントと捉え、これに向けて組織内を活性化し、さらに成長するための取り組みを開始しました。

この取り組みを推進するのが、各施設の職員からなる「プロジェクト委員会」です。約2カ月に1度、委員会を開催し、「法人理念の策定」「より良い職場環境づくりのための施策や制度の創設」「30周年記念事業」について協議・検討を行っています。

異なる施設の職員が意見を交わすことで、自ら進むべき方向性を見出し、積極的に課題に取り組むことをめざしています。こ

したプロジェクトを通して、福祉サービスのより一層の向上を図っていく考えです。



地域の皆さまの生命を守るために ～AEDの導入

当社会福祉法人では、すべての施設にAED(自動体外式除細動器)を導入しています。高齢者の方にサービスを提供する施設では、心室細動の発症リスクが高くなるため、その対応策としてAEDを設置し、全職員が正しく使用できる体制を整えてきました。

各施設や事業所では、デモ機による実技指導講習会を行い、適切な対応ができるように努めています。また、職員自身が定期的な実技講習を行えるよう、札幌市防災協会が認定する応急手当普及員資格の取得も推奨しています。これ以外にも、札幌

市の「さっぽろ救急サポーター」への登録や、地域に向けた勉強会なども実施。地域への貢献活動の一環としても、AEDを活用していく予定です。



職員のキャリア形成を支援 ～キャリア支援室

福祉に携わる職員にも将来のキャリアを提示して、仕事へのモチベーション向上や人としての成長につなげてもらおう、という狙いから、キャリア支援室を本部内に設けました。キャリアステップのプログラムを設定することで将来像が明確になり、人生設計にも役立つ取り組みとして、2010年から本格的にスタートしました。

体系的な研修プログラムの構築や外部への派遣(交流)、能力評価の標準化など、職員一人ひとりの能力を高め、働く喜びを感じてもらえるような仕組みを構築していく予定です。これまでも

グループ全体での研修は行ってきましたが、各施設ごとに推進できるような、当社会福祉法人独自のシステムをめざしています。

職員が自信と誇りを持って働けるよう、キャリア支援室を中心にサポートを続けていきます。



社会福祉法人 溪仁会 DATA

特集「誕生」青年期

特集「壮年期」中年期

特集「高年期」ターニングポイント

ステークホルダーダイアログ

各施設の取り組み

グループ全体の取り組み

トップメッセージ

安全・安心なケアの実現をめざして

医療安全管理室の取り組み

「手稲溪仁会病院」

手稲溪仁会病院では、従来は委員会で検討していた医療安全の対策について、2007年に実務部門として医療安全管理室を立ち上げました。専従のスタッフを置き、誰が行動するかをはっきりさせることで、効果的に業務改善を進めています。

医療安全管理委員長
手稲溪仁会クリニック院長
樫村暢一



マニュアル作成・業務改善は動きやすさを必ず意識

手稲溪仁会病院での医療安全の体制は、院内の各部門にセーフティ・マネジャーを配置し、各マネジャーは医療安全管理委員会に委員として参加します。委員会で決定した対策、特にマニュアル作成や業務改善にかかわる対策に対し、それが現場で役に立っているのかどうかを検証するのが管理室の役割です。

医療安全管理委員長の樫村暢一手稲溪仁会クリニック院長は、「マニュアルを増やす一方では現場の動きが取れなくなるので、必ず効果のないものをやめてから新しく作成する『引き算のマニュアル作成』となるようにしています。また、業務改善の際も、誰かの業務を他の人や部署に移動するのではなく、かかわる部署全体の業務が軽くなる『Win-Winの業務改善』を心掛けています」と説明します。

医療安全管理室の業務内容

- 医療安全管理委員会の開催(月1回)
- 院内ラウンド(週1回)
- 医療安全に関する研修会の開催(年4~6回)
- 医療安全管理室カンファレンス・ミーティングの開催(各月2回)
- インシデント・アクシデントレポートの収集・分析処理
- 院内広報誌「SAFETY NEWS」の発行



職員の意識を向上させる「5S」と「KYT」

職員全体の医療安全に対する意識を向上させるため、業務改善については「整理・整頓・清掃・清潔・しつけ」の「5S」を合言葉として、不具合が見つかりやすい職場

環境づくりに努めています。また、「KYT(危険予知トレーニング)」として、日常の業務の中で危険な箇所を見つけられるよう各人が心掛けています。KYTの中には「健康問いかけKYT」という、体調が悪い時に今の健康状態できちんと安全な仕事ができるのか、と仲間と声をかけて業務を交替し合う活動もあり、仲間同士でのコミュニケーションも強めています。

- 5Sとは
- 整理(不要なものは捨てる)
 - 整頓(すぐに使えるようにする)
 - 清掃(隠れた不具合を見つける)
 - 清潔(異常がわかる仕組みにする)
 - しつけ(習慣になるよう教育する)

多方面からの周知と現場へのフィードバック

研修や講演会は参加者が限られることから、その内容は院内広報誌「SAFETY NEWS」にまとめて発行するほか、院内ホームページへの掲載、他の会議・委員会で周知徹底しています。また、対策によって得られた効果は各部署にフィードバックすることによって、現場のやる気を上げています。

「エラーはゼロにはできませんが、ゼロに近づけること、そして起こったことの影響を最小限にすることはできます。これからは、実施した対策が本当に役に立っているのかどうかの検証の精度を上げ、その結果を現場にもっとフィードバックしていくことを目指して活動に臨みたいと思います」



急変時の対応に関する研修会を開催

【社会福祉法人溪仁会】

福祉施設にも医療ニーズの高いご利用者さまが増え、安全への対策は必要性を増しています。そこで2010年9月15日、手稲溪仁会ハーティケアセンターにおいて、手稲溪仁会病院の救命救急認定看護師を講師として、患者さまの急変時の対応について研修会を行いました。札幌市内の他の事業所からも合わせて、22名が参加しました。

ビデオやスライドを見ながら対応のしかたを学んだあと、小グループに分かれて心肺蘇生とAEDの使用方法を実践しました。



各スタッフからは「車で移動中はどうするのか」「ご高齢で背中が湾曲したご利用者さまの場合は」など、勤務中に起こるさまざまな場面を想定した質問が活発に飛び交いました。

これはグループ全体のシームレスな連携をめざした取り組みの一つでもあります。研修内容が根付くよう、年2~3回の定期的な開催をめざして取り組みを続けています。



安全性向上の取り組み

手稲家庭医療 → クリニックの医療安全体制

本院である手稲溪仁会病院の医療安全システムをベースにしながら、患者さまの状況や医療体制などに合わせ、クリニックに即した内容で運用しています。月に1回、院長や看護科マネジャーなどによる「医療安全委員会」を開催するほか、カンファレンスや院内勉強会などもすべて安全管理の一環と考え、リスクや問題があればすぐに解決を図るようにしています。また、日々の業務における安全管理も重視。研修医の処方確認の徹底や、毎日のミーティングで情報を共有するなど、安全な医療体制の構築をめざしています。

札幌西円山病院の → 医療安全体制

各部門の代表者によって構成される「医療事故防止対策委員会」や「衛生管理委員会」のほか、院長や看護部長といったトップマネジメントによる「医療問題検討会議」など、医療安全にかかわる多くの委員会が活動を展開しています。なかでも「医療事故防止対策委員会」は、各部門のリスク管理を担当し、医療事故の情報収集や分析、防止対策や職員への啓発活動など、医療安全の中心的な役割を果たしています。専任の看護師長がリーダーを務めることで臨床での対応をスピーディに行い、現場に即した医療安全対策が図られています。

定山溪病院の → 医療安全体制

「抑制廃止」掲げる定山溪病院では、早期から患者さまの安全を確保する取り組みに力を入れてきました。2000年より院内委員会を立ち上げ、現在は「医療安全管理委員会」において、医師、看護職、リハビリ職、薬剤師、MSW、事務スタッフといった各部門の代表者が連携しながら、リスク情報の分析や予防対策などを推進しています。ささいな事例でも病院全体の情報として共有することで、再発防止や環境改善に役立て、職員の意識向上を図るなど、患者さまやご家族に安心していただける体制づくりに努めています。

特集「誕生」青年期

特集「壮年期」中年期

特集「高年期」ターミナル

ステークホルダーダイアログ

各施設の取り組み

グループ全体の取り組み

トップメッセージ

特集「誕生」青年期

特集「壮年期」中年期

特集「高年期」ターミナル

ステークホルダーダイアログ

各施設の取り組み

グループ全体の取り組み

トップメッセージ

活動への理解を深めていただくために

皆さまと私たちのコミュニケーション

溪仁会グループは、当グループの活動を理解していただき、信頼関係を築くための事業を行っています。市民公開講座のほか、さまざまなツールを通じてサービス提供にかかわる情報を公開するなど、皆さまとともに手を取り合いながらより良い保健・医療・福祉サービスを追求しています。

最新のがん治療に関する市民公開講座を開催

溪仁会グループでは、さまざまな病気の治療法や生活面での注意などをご理解いただくための活動を定期的に行っています。一般向けに広く、開かれた公開講座の形で開催しているもので、一般市民の関心の高い分野



について、ていねいにわかりやすく解説するものです。

2010年10月には溪



仁会円山クリニック開設20周年記念として、溪仁会グループ市民公開講座「最新のがん治療～がんと上手につき合うために～」を開催し、約400名が参加されました。

今回の公開講座は講演と各種の体験ブースで構成。講演では「最新のがん治療」と題して手稲溪仁会病院の医師5人がそれぞれの専門分野について、最新のがん治療の実例を紹介しました。講演の途中には、溪仁会円山クリニックの健康運動指導士による「その場でできるストレッチ体操」を行いました。

がんや禁煙、保健についての無料相談コーナー、体力測定ブースや骨密度測定などの体験ブースにも多くの方が訪れ、参加者それぞれが健康への関心と知識を深める場となりました。

溪仁会グループのニュースをWeb版サラネットを提供

溪仁会グループの広報誌『サラネット』の内容をインターネット上で閲覧できるのが「Web版サラネット」です。2002年11月にスタートした当初から、グループ全体のニュースを広くお伝えする媒体として改善を重ねてきましたが、2009年6月、「より詳しく・より見やすく」をコンセプトに内容・デザインを一新しました。

新しい「Web版サラネット」は、デザイン面ではユニバーサルデザインを取り入れました。できるだけ多くの方が利用できるように、色覚に障がいがある方でも見やすい色づかいを採用したほか、視覚に障がいをもつ方が利用する音声読み上げ機能のついたインターネット閲覧ソフトでも、できるだけ多くの情報が音声に変換されるように工夫しました。

記事内容の更新は、ニュース記事は随時、特集などの主要記事は本誌の発行日に更新しています。過去のバックナンバーも一覧で簡単に見ることができるようになり、

さらにコーナーごとのバックナンバーもまとめて見ることができるようになりました。

今後もタイムリーな話題、健康づくりのアドバイスなど、



当グループに親しみをもっていただき、より身近に感じてもらえるような情報を発信するよう努めていきます。



職員一人ひとりの健康を守るために

溪仁会健康保険組合の設立

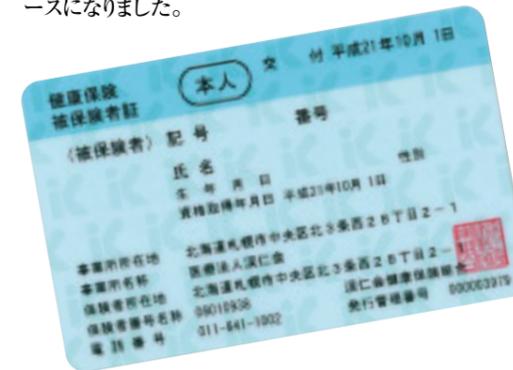
溪仁会グループでは、職員の福利・厚生を充実させるため、2009年10月1日に「溪仁会健康保険組合」を設立しました。独自の健康保険組合を運営することによって、職員とその家族の健康管理を推進し、誰もが健やかに働ける環境づくりをめざしています。

北海道では初の設立となる医療・福祉法人の健康保険組合

地域において、保健・医療・福祉のシームレスなサービスを提供している溪仁会グループでは、職員に対する福利・厚生サービスの充実も目標の一つとして掲げています。その取り組みの一環として、大きな事業となったのが、2009年10月の「溪仁会健康保険組合」の設立でした。3,500名を超える職員を擁し、さまざまな施設・サービスの複合体である当グループにとって、独自の健康保険組合の設立は必然であり、また念願でもありました。

対象となるのは、医療法人と社会福祉法人の全職員。被保険者数は設立時が3,459名、1年後の2010年9月末現在で3,621名となっています。同組合の設立によって、全国一律の条件で運営される社会保険に比べ、被保険者の職員とその家族に対し、ニーズに適した柔軟かつきめ細やかなサービスを実施することが可能になりました。

北海道では、企業や法人独自の健康保険組合は数が少なく、現在は当グループも含めて15組合となっています。また、北海道での健康保険組合の新規設立は21年ぶりのことで、医療と福祉の法人では、北海道初のケースになりました。



職員の健康状態の傾向を分析し将来的には予防対策も

医療費の抑制が課題とされる現代では、医療・福祉に携わる者としての自覚がより必要になります。同組合の小野寺健一常務理事は、「健康保険組合の設立によ

溪仁会健康保険組合
常務理事
小野寺 健一



って、生活習慣病予防や健康管理など、職員と家族の健康増進を支援し、グループ全体の健康管理を推進することも狙いの一つ」と話します。

当面の課題は、家族に対する特定健診の受診促進。40歳以上の扶養家族については、書面で通知するなど、受診率を高める活動を行っています。また、そうした健診の結果をデータとして蓄積・分析することで、職員の健康に関する傾向を割り出し、将来的には病気の予防や健康増進に役立てていく予定です。

こうした取り組みは、医療費全体を抑制し、組合の財政面の健全化を実現するためのものです。保険料率の負担増を抑えながら、安定した運営を図るために最優先すべき活動と考えています。小野寺常務理事は「健康保険組合にとって、採算が合わないという状況は許されません。まずは運営を軌道に乗せ、組合を確実に継続させていくことが大切だと考えています。数年間で土台をしっかりと固めてから、次の段階に移っていききたい」と展望を話します。

組合設立に伴い、職員の理解を促すため、健康保険の仕組みや給付内容、手続き方法などを紹介した「健康保険のしおり」を作成し、全職員に配付しました。職員とその家族の健康を守ることは医療・福祉サービスの提供者である当グループの責任ととらえ、これからも職員が安心して仕事に臨むことができる環境を整えていきます。



サービスの質向上をめざして

第三者評価の積極的な活用

溪仁会グループでは、質の高いサービスを提供するために職員が一丸となる仕組みづくりとして、また、溪仁会グループが提供するサービスの質を皆さまにわかりやすい形で説明するために、第三者による評価を積極的に活用しています。

「慢性期医療認定病院」認定

定山溪病院は2010年5月に、一般社団法人日本慢性期医療協会による「慢性期医療認定病院」の認定審査を受審し、第1号の認定病院となりました。慢性期医療に特化した審査の認定を受けたことで、さらに医療サービスに対する質が裏付けされたこととなります。これからは、認定審査の基準内容を継続して維持するとともに、良質な慢性期医療をめざす活動を続けていきます。



ISO9001 (JIS Q 9001)

品質マネジメントシステムの国際規格であるISO9001は、2001年より溪仁会グループの各施設で審査登録を始め、2005年にはそれらを統一してグループ全体で審査登録を行いました。当グループが提供している保健・医療・福祉サービスのレベルを一定以上に保ち、さらに継続的な改善を図るためにも、この規格を登録・維持していくことが重要と考えています。



ISO14001 (JIS Q 14001)

当グループでは社会的責任の一つとして環境問題を捉え、継続的な検討・改善が重要と考えています。環境マネジメントシステムであるISO14001は2004年に溪仁会グループ全体で審査登録し、その後の登録更新に取り組んでいます。ゴミの分別や感染性廃棄物の適正管理などが徐々に徹底されるようになり、この取り組みは環境問題に対する職員の意識改革の一助になっています。



医療機能評価

財団法人日本医療機能評価機構が第三者の立場で医療機関の「質」を評価し、一定の水準をクリアした病院を認定するものです。溪仁会グループでは1998年に定山溪病院が長期療養型の医療施設として日本初の認定を受けました。その後も、2005年には手稲溪仁会病院、2007年には札幌西門山病院が認定を受け、当グループが提供する医療サービスの質をチェックする機会として、積極的に活用しています。

個人情報保護 (プライバシーマーク)

個人情報保護の徹底は、患者さま・ご利用者さまとの信頼関係を築く上で不可欠なことと位置づけ、個人情報の1点1点について保護する仕組みを考え、実践しています。グループ全体で取り組んだプライバシーマークの付与認定もその一環です。社会福祉法人溪仁会が2006年6月にプライバシーマーク (JIS Q 15001) を取得。これを皮切りに、溪仁会グループ全体、4法人でプライバシーマークを取得しました。

社会から信頼される組織であるために

コンプライアンスへの新たな取り組み

溪仁会グループでは、社会から信頼される組織づくりをめざし、2003年に4つの「事業理念」と11の「サービス憲章」を制定し、2004年からコンプライアンス体制を導入し浸透を図ってきました。現在は新たなステップの時期ととらえ、コンプライアンスマニュアルの見直しや職員への啓発など、より組織風土に合ったコンプライアンス体制の見直しを開始しています。

誠実な組織であるために コンプライアンスを重視

コンプライアンスはCSR活動を支える基盤であり、社会から信頼される組織づくりには欠かすことのできない義務でもあります。当グループは、保健・医療・福祉サービスの提供者として、コンプライアンスの徹底を重要課題の一つと位置づけ、組織への浸透を図るために2004年度から継続的な活動を展開してきました。

当グループでは、コンプライアンスを徹底することによって、組織としての信頼やサービスの質を高めるだけでなく、職員の意識改革やスキルアップ、職場環境の改善などにつなげることをめざしています。そして、グループの全職員が「事業理念」や「サービス憲章」の価値観を共有し、公正で責任ある倫理的な行動をとることで、組織としての社会的責任を果たすことができると考えています。

そこで当グループでは、組織全体にコンプライアンス意識を根付かせるため、「サービス憲章」の各項目に対応した46の「行動基準」を策定し、「コンプライアンスマニュアル」としてグループ内に配付するとともに、職員を対象とした相談報告体制の整備・充実や、研修会・勉強会による各種啓発活動などを行ってきました。また、2004年度から2006年度にわたって、「コンプライアンスアンケート」による職員間の意識調査を実施し、コンプライアンスに対する理解度や浸透度などを把握。その結果は事業体ごとに報告され、現在の職員満足度調査といった各々の取り組みに引き継がれています。

職員ニーズや社会的要請の変化に即した 新たなコンプライアンス体制へ

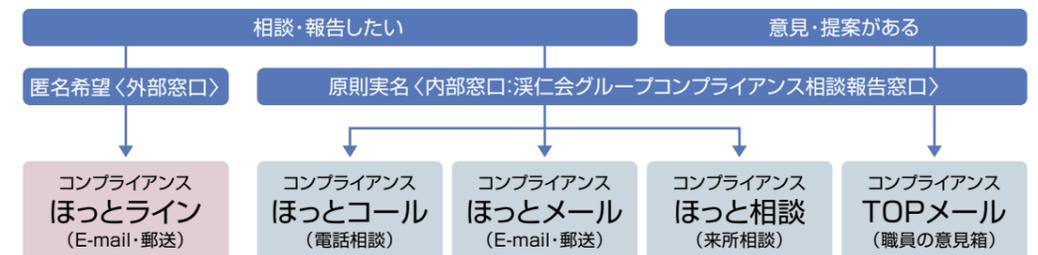
これまでの取り組みについて、医療法人溪仁会法人本部コンプライアンス室の川井田能史主任は「当初はグループ全体の活動を主体に進めてきましたが、現在は各事業体がそれぞれの組織特性に応じた活動を行っています。しかし、各事業体や部門部署単位における活動に温度差があることから、新たな方策の必要性が生じてきました」と話します。以前から現場の声として「コンプライアンスマニュアル」の活用のしにくさ、行動基準の分かりにくさなどが上がっていました。それがコンプライアンス活動に対する温度差を生む原因の一つになっていると考えられます。

こうした状況を改善するため、より当グループの組織風土に合ったコンプライアンス体制を再構築する取り組みがスタートしました。2010年7月に各病院の総務課長をメンバーの中心としたワーキングチームを立ち上げ、「コンプライアンスマニュアル」の見直しに着手。職員がより使いやすく、現場により浸透するよう内容の検証を行ったうえで、2012年の改訂版発行をめざしています。

「新マニュアルの見直しには、2010年11月に発行された社会的責任規格ISO26000の視点も欠かせません」と川井田主任。職員が安心して働ける職場環境づくりに資することはもとより、新しい社会の要請に応じていくこともコンプライアンスの重要な役割と考え、これからも取り組みを推進していきます。

コンプライアンス相談報告体制

溪仁会グループはコンプライアンス活動の一環として、グループ内に広く存在する問題を受け止め、積極的に解決していくために「コンプライアンス相談報告体制」を整備。グループ職員を対象とした「コンプライアンス相談報告窓口」や第三者機関による「ほっとライン」を設置し、改善を図っています。



環境保全への取り組み

グループ各施設で行う環境活動

浜仁会グループは、地球環境へ配慮した活動に取り組んでいます。グループ全体の環境配慮の指針として定めている“浜仁会グループ環境方針”に基づき、各施設ではさまざまな環境活動が展開されています。各施設で環境活動を牽引する担当者より、施設の“エコ自慢”を添えて紹介します。

浜仁会円山クリニック

当クリニックでは、職員全員で取り組みができるような独自の環境活動を企画するために、各部署から推進メンバーを選出して委員会を組織して活動しています。全員参加をめざしています。



浜仁会
円山クリニック
業務管理課課長代理
山下 重春



札幌西円山病院

開設30周年の歴史の中で得た備品類の有効活用に焦点をあて、リユースの対象品の選定作業を行っております。ごみ拾いなどの活動にも積極的に参加し、環境活動の活性化に注力しています。



札幌西円山病院
サブライサービス課
主任代理
葦村 隆二



西円山敬樹園

雑草が伸び、やぶ蚊が発生し、湿気で外壁にカビが付着するほど環境の悪かった裏庭を整備しシイタケ栽培を始めました。蚊が減り、シイタケの収穫もあり皆さんに好評です。



西円山敬樹園
施設管理課
課長
万丈 和正



コミュニティホーム八雲

雪解けシーズンに空き缶、タバコの吸い殻などがたくさん出てくるので、地域のごみ拾いを行っています。近隣の「さらんべ公園」の桜が咲く前に周辺をきれいにしようと実施しています。



コミュニティホーム
八雲
経営管理課
安田 智昌



手稲浜仁会ハーティケアセンター

エコキャップ収集活動はご利用者さまの関心も高く、順調に集まっております。集まったエコキャップでモザイク画を作成し、手稲区の区政20周年を記念したイベントで展示しました。



手稲浜仁会
デイサービス 副主任
林谷 康史



手稲浜仁会医療センター

センターとして目下の課題は、省エネ法下の第一種エネルギー管理指定工場としての活動です。他にもグループ全体で行うリングブル収集や清掃活動等を中心的に推進しています。



手稲浜仁会病院
施設サービス課
課長
東 信弘



定山溪病院

省エネ対策として、ボイラーの運転調整や温泉熱の有効活用、各種省エネルギー機器の導入などを積極的に推進しています。CO₂排出量削減と費用抑制の相乗効果が現れてきています。



定山溪病院
サブライサービス課
課長
齊藤 秀樹



コミュニティホーム白石(居宅介護支援事業所)

ご利用者さま宅に訪問する際、近い距離はできる限り自転車あるいは徒歩で行動するよう心がけています。環境はもちろん、経費的にも健康的にも優しい取り組みとして継続中です。



コミュニティホーム
白石
施設管理課課長
高岡 賢治



コミュニティホーム美唄

雪を貯蔵し、その冷熱エネルギーを“雪冷房”として利用しております。二酸化炭素の排出量を年間4,950kgCO₂削減する計算になります。

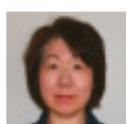


コミュニティホーム
美唄
管理課課長
古川 秀



新琴似浜仁会ハーティケアセンター

シュレッダーを使う際に、「一時保管場所」に保管してから一括で行うようにしています。ほんのわずかな電力使用の削減かと思いますが、「ちりも積もれば山となる」の気持ちで職員一同賛同した取り組みです。



新琴似浜仁会
デイサービス
瀧本 真里



円山ハーティケアセンター



円山ハーティ
ケアセンター
所長
木下 雄一

円山小学校に雑巾を贈呈したお返しとして生徒さんから「ゴミ収集カレンダー」をいただきました。デイサービス居室2カ所に貼り、ご利用者さま共々、日頃からごみの分別を心がけています。



青葉ハーティケアセンター



あおば
デイサービス
センター
南江 尚宏

レクリエーションで使うワイヤレスマイクは、使い捨ての電池だと約1週間しか持たないため、環境・コスト面から充電式乾電池を使用しています。今後ほかの電池も切り替えを検討しています。

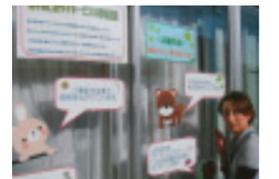


豊平ハーティケアセンター



豊平浜仁会
デイサービス
副主任
若井 智也

定期的な環境教育を行うほか、事務所の窓に環境活動ポスターを貼り出すなど、近隣住民への活動PRを実施しています。



株式会社ハーティワークス



株式会社
ハーティワークス
業務課課長
柳沢 容子

当社が身近にできる活動は? という声が職員から上がり、全職員で月に1度、事務所周辺の清掃活動に取り組んでいます。地道な活動ですが継続を心がけて実施しています。



グループ全体の活動

各施設で行う環境活動のほか、グループ全体の活動として「リングブルやボトルキャップ収集活動」「廃油リサイクル活動」「海浜の清掃活動」を行っています。

空き缶のリングブルを収集し、一定量に達すると車いすに交換できます。車いすは公共施設へ寄付しました。



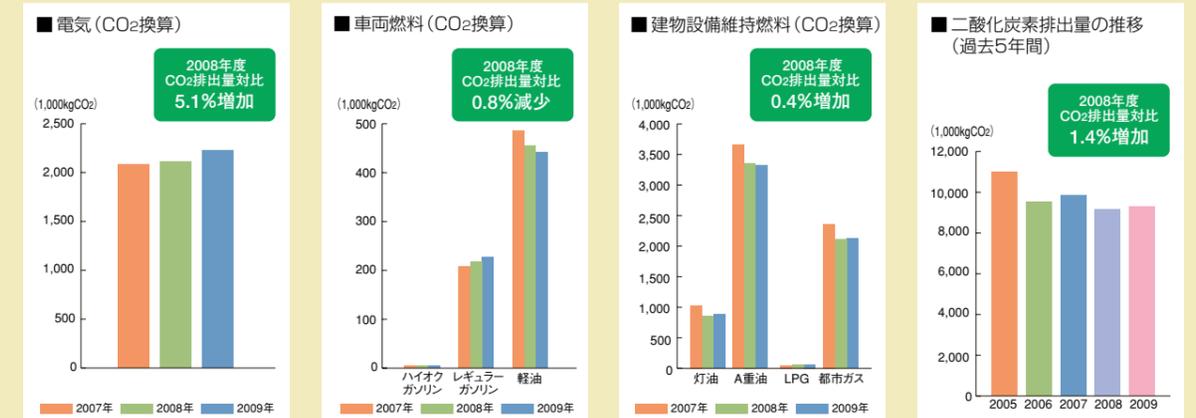
家庭で出た調理用廃油を再生企業で回収し、バイオディーゼル燃料として再生使用しています。



グループ職員や家族・ステークホルダーと共にビーチ清掃活動も、今年で5回目となりました。

浜仁会グループの環境パフォーマンス

環境活動の成果を測定する指標として、浜仁会グループでは“環境管理データ”をシステム整備して運用しています。電気や車両燃料、建物設備維持燃料の使用量をCO₂排出量に換算し、環境パフォーマンスの可視化に努めています。「日ごろの地道な活動によって、どんな効果を得ることができているか」全職員へ意識啓蒙を図ることも、グループで行う環境活動の目的の一つです。



CSR経営のさらなる深化と 溪仁会の使命とは

溪仁会グループ最高責任者
医療法人溪仁会 理事長

秋野 豊明



が引き金になって、CSR経営は当然の成り行きとなりつつありましたが、全国の医療機関では溪仁会グループが初めてCSR経営の旗を掲げたのです。

CSR経営とは、社会からの信頼を構築する事業を展開して社会へ貢献し、地域に信頼されるブランドを目指すことです。この基本方針に基づき、それぞれの病院や施設では、患者さま・ご利用者さまを第一に考える医療やケア、地域との連携と協働、そして自己研鑽・自己変革などCSRの目標を掲げているのです。

またCSR経営はグループ内の職員に社会へ貢献するという意識の高い集団になってほしいという経営側からのメッセージでもあります。つまり、組織の方向性・指針となる言葉がCSRなのです。

CSR経営を業務に生かすためには、マネジメントによる裏付けが必要ですが、溪仁会グループでは、ISO（品質、環境）プライバシーマーク（個人情報保護）の第三者認証を取得し、また内部監査員を多数育成して、自主・自律の検証の体制を整備してきました。さらにバランス・スコアカードを本格的に導入し、顧客、業務プロセス、財務、学習と成長の4つの視点から、PDCAサイクルで改善を図る体制がそれぞれの組織に整備されてCSR経営が浸透しつつあります。

地域医療を支えるために 各病院それぞれの役割

長年にわたる診療報酬や介護保険報酬の引き下げで、わが国の医療・福祉の経営環境は非常に厳しくなりました。このような状況の中で、経営を安定化し“存在し続ける”ために、それぞれの病院・施設が北海道における地域医療や福祉政策で一定の役割を担い、道民に信頼されるグループになることを目指しています。つまり、医療・福祉政策の一翼を担うことが公益性と持続性のCSR経営を深化させることになるのです。

北海道の4疾病（がん、脳卒中、心筋梗塞、糖尿病）、5事業（救急医療、災害医療、へき地医療、周産期医療、小児医療）などの医療計画において、手稲溪仁会病院は中核的な役割を担っています。北海道で初めてのドクターヘリによる広域救急を担当し、地域がん診療連携拠点病院に指定されています。泊村の茅沼診療所の事業指定管理者としてへき地医療を支援、北海道の緊急臨時的医師派遣事業に積極的に協力

し知事表彰されました。また、手稲家庭医療クリニックを開設し、大学の医学教育では育成が難しい地域密着型の家庭医の育成に努めています。今年はドクターヘリ基地病院の経験を生かし、広域の北海道で将来必要とされる「ドクタージェット」の研究運航に参加しました。民間病院が公共的な役割を担うこのような取り組みは、地域から評価・支持されています。地域から高い評価をいただくことが、職員全体の志気を鼓舞し、モチベーションが大きくアップする契機となっています。

開設20周年を迎えた溪仁会円山クリニックは、年間約3万人の健診と保健指導に加えて、生活習慣病外来と禁煙外来をスタートし、予防医療センターの役割を担っています。

高齢者の慢性期医療とケアを提供している札幌西円山病院と定山溪病院は療養病床の再編という難題に直面しています。国は社会的入院を排除し医療費を抑制するために、療養病床再編の方針を打ち出し、介護療養病床は2012年3月で廃止の予定でした。しかし、政権が変わって廃止は凍結となりましたが、いずれそのあり方は問題になるでしょう。医療必要度による診療報酬の設定により、重症者の割合が多くないと経営が厳しくなりました。しかし、北海道では療養病床の社会的ニーズは非常に高く、療養病床からの患者さまの受け皿である特別養護老人ホームや介護老人保健施設は待機者が溢れている状況です。私どもは社会の要請に応えていくのが使命です。療養病床のCSR経営は新たな局面を迎えているというべきでしょう。

社会福祉法人溪仁会に自治体などから特別養護老人ホームや介護老人保健施設の開設要請が多く寄せられており、超高齢化社会への対応が喫緊の課題になっていることを痛感します。2011年8月に札幌市の介護保険計画の一環として月寒に特別養護老人ホームを開設しますが、この施設は札幌西円山病院や定山溪病院と連携して、グループ内では「介護難民」を出さないという決意で運営していきたいと思っています。



溪仁会が永続するための 人（財）育成と未来の展望

医療や福祉は労働集約型の産業です。つまり、人の作業が価値を生み出すのです。したがって、優秀な人材は財産です。社会から信頼を得るCSR経営を支えるのは、まさにそのような人材（財）であり、職員の教育・研修は非常に重要です。

働き手から選ばれる組織、つまり、職員満足度の高い職場をつくるのが、溪仁会が永続しCSR経営を続ける基本です。そのために、子育て支援、ワークライフバランス（仕事と生活の調和）、短時間勤務など多様な勤務形態に対応するなど働く環境の整備が課題です。今年度は札幌西円山病院の保育所を拡張して定員を60名から100名に増やすことにしました。

溪仁会グループには「積極的に学ぶ」という組織風土があります。それぞれの職場・職種における業務研修は非常によくプログラムされています。また、法人本部主催の階層別（新人、新任役職者、若手選抜者など）、年代別の一日研修を年約30回開催し、約1,500名の職員が参加しています。

手稲溪仁会病院では米国ピッツバーグ大学と提携した3年間の初期臨床研修を行っています。全国から毎年約20名の研修医が集まっています。研修医の活力は病院全体に大きな刺激となり、病院活性化の風になっています。

日本の医療と福祉は変革の時期を迎え、新しい時代が来る予感があります。溪仁会は昨年30周年を過ぎ、これからの未来に向けてさらに飛躍するために、自分たちは何をすべきかを考える時期に来ています。今年、ISO26000の国際規格「社会的責任」が発表されました。これは第三者評価ではなく自己宣言です。溪仁会グループの確かな未来を切り開くためには、社会からの要請に応えて社会的責任をどのように深化し、信頼を構築していくかを追求し続けることであり、現在、ISO26000の自己宣言をするための準備を進めています。

特集「誕生〜青年期」

特集「壮年期〜中年期」

特集「高年期〜ターミナル」

ステークホルダーダイアログ

各施設の取り組み

グループ全体の取り組み

トップメッセージ

特集「誕生〜青年期」

特集「壮年期〜中年期」

特集「高年期〜ターミナル」

ステークホルダーダイアログ

各施設の取り組み

グループ全体の取り組み

トップメッセージ

第三者意見



東京交通短期大学 学長

田中 宏司 (たなか ひろし) 様

1959年中央大学法学部卒。1954年～90年日本銀行勤務の後、早稲田大学講師等を経て、2002年～06年立教大学大学院教授。日本経営倫理学会副会長、経営倫理実践研究センター理事・首席研究員、経済産業省「ISO/SR国内委員会」委員等。著書多数。

溪仁会グループは、2006年度に5カ年の中期経営計画を立て「CSR経営の確立」に取り組んできており、本年度はこれまでの実践を総括するとともに、今後のCSR活動の新たな展望を行っています。

本年度の特徴は、“皆さまの一生に寄り添う溪仁会の「ずーっと。」”を特集として、誕生～青年期、壮年期～中年期、高年期～ターミナルと区分して、人生に寄り添う医療活動などを具体的に解説しています。さらに、ステークホルダー・ダイアログとして、医療・福祉を学ぶ学生の現場見学と意見交換を行い、若者の意見を的確に取り上げています。

(優れていると評価できること)

第1は、グループの「事業理念、ミッション、サービス憲章と行動基準」が、それぞれのCSR活動の指針として明確なことです。事業理念の「安心感と満足の提供」「信頼の確立」「プロフェッショナル・マインドの追求」「変革の精神」は、特集やグループ施設におけるCSR活動に具体的に生かされています。

第2は、グループの6つの施設の概要とCSR活動が、写真を織り交ぜて生き生きと描かれています。各施設の院長・理事長は、地域医療、家庭医療、慢性期医療、予防医療、地域福祉への貢献などについて、方針と運営状況を自ら説明しており、何とも魅力あふれる語りです。それぞれの該当ページの下部には、病院の内容、特徴、沿革などが簡潔に紹介され、読者の理解を助けています。

第3は、グループ全体としてのCSR活動を6つの目標別にまとめています。これらは、安全・安心なケアの実現をめざし

での医療安全管理室の取り組み、市民公開講座やWeb版サラネットによる情報公開、第三者評価の積極的活用、コンプライアンス体制の再構築と徹底、環境保全への取り組みなど、具体的な活動と成果をまとめています。

第4は、理事長秋野豊明氏のトップメッセージ「CSR経営のさらなる深化と溪仁会の使命とは」では、過去5年間の努力の成果を踏まえて将来への展望を見事に描いています。トップ自ら、地域医療を支える各病院の役割や、永続するための人材の育成と未来への展望を率直に語り、感動を覚えます。

(今後努力を期待すること)

第1は、30周年を過ぎて将来の飛躍のために、検討中の新たなグランドデザインがまとまり、永続的な発展への道筋が明示されることです。地域医療の重要な担い手として、今後とも地域の人々と一緒に持続可能な社会への貢献を期待します。

第2は、2010年11月に発行した社会的責任の国際規格ISO26000への具体的な対応です。この規格は、病院や企業、大学などあらゆる組織を対象としており、ガイダンス規格であり、第三者認証を目的としません。当グループとしては、すでに対応を研究していますので、組織が取り組むべき7つの中核主題やステークホルダー・エンゲージメントなどについて、現状を見直し経営戦略の基軸に織り込み対応することが重要です。

溪仁会グループのCSR活動は、これまでトップのリーダーシップのもと、地域の人々とともに素晴らしい実績を残しています。今後とも、CSR経営を推進し成果をあげられるよう大いに期待しています。

参考ガイドラインについて

社会的責任 (Social Responsibility) の国際規格として、国際標準化機構が作成した「ISO26000」が2010年11月1日に発行されました。ISO26000は第三者認証を目的としないガイダンス規格であるため、規格要求事項や適合性の評価などはありませんが、当グループではこのISO26000を手引きとして、まずはこれまでの事業活動や目標などをCSRの視点で総括することから始めています。来年度はこれをさらに具体的な取り組みにつなげ、グループ内にCSR活動をより深く浸透させていきたいと考えています。

各病院、施設、事業の実績データを収載した「溪仁会グループ年次報告書」は、[溪仁会グループホームページ](#)をご覧ください。

[溪仁会グループ年次報告書](#)

検索

●編集事務局／

医療法人溪仁会 法人本部 広報室

●発行年月／2010年11月

●次回発行予定／2011年11月を予定しております。

●発行責任部署および連絡先

医療法人溪仁会 法人本部

〒064-0823 札幌市中央区北3条西28丁目2番1号サンビル6F

TEL 011-641-9970 (代) FAX 011-641-9951

E-mail : editor0110@kejinkai.or.jp

ずっと。



私たち溪仁会グループの仕事は、
あなたの病気を治すことだけでなく、
年齢に応じた健康維持のアドバイスをしたり、
介護を含めた老後の安心のお手伝いをすることでもあります。
心身ともに輝いて生きるために。
生涯にわたって溪仁会グループは、ずっとあなたのそばに。

ik 溪仁会グループ

〒064-0823 札幌市中央区北3条西28丁目2番1号 サンビル6F
TEL 011-641-9970 (代) FAX 011-641-9951

[溪仁会グループホームページ](#)

溪仁会グループ

検索

<http://www.keijinkai.com>

